

《評伝・木村熊二の生涯と小諸義塾》

【はじめに】

小諸城址「懐古園」は市民の憩いの場で、多くの観光客も訪れている。城址の三之門を入り右手の坂道を登ると正面に二之門址の石垣があり、一枚のレリーフパネルがはめ込まれている。

このパネルは小諸義塾の創立者木村熊二を慕う、義塾卒業生の寄付金により作られ昭和十一年四月十九日に除幕され、レリーフの下には「我らの父木村熊二先生と小諸義塾の記念に」と、義塾の教師であった、作家島崎藤村が筆を揮っている。

木村熊二と言われて即座にその人物を思い出す人は少ないと思われる。

彼が創立した小諸義塾は三之門を出て千曲川に向う坂道に沿った、旧士族屋敷で明治二十六年十二月一日開塾している。

懐古園を訪れる観光客の多くは、木村熊二と島崎藤村の関係を知るよりも「小諸なる古城のほ」と日本近代の自我解放の甘い叙情を詩いあげた詩人、島崎藤村の世界に浸ろうとする。藤村が小諸義塾の教師として赴任したのは、創立者木村熊二との交流からであることは忘れ去られている。

教師として小諸に赴任していた頃の藤村の様子は書籍として多く残されている。

そこに描かれている木村熊二以後熊二の姿を知る事も出来るが、それは藤村の目を透しての熊二の姿であつて、敬虔な基督教徒で、偉大な教育者であつた彼の実像を知ることは難しい。

幕臣として維新の動乱を生き抜き、十二年余の米国留学を経て、基督教の伝導者となつて帰国した熊二に関しては、明治以後の基督教史にその名前が散見されるだけで、近代日本に於ける女子中等教育の先駆者でありながら、自ら創立した明治女学校の校長を、後輩の巖本善治や妻の鏡子と間違えられるという位、その功績は知られていない。日本の近代文化の発展に貢献できる貴重な経験と、多くの明治文化人との交友歴を持つていたにも拘わらず、それを充分に發揮することなく、昭和二年二月二八日に八三歳で永眠している。

弘化二年(1845)に生まれ、嘉永、安政、万延、文久、元治、慶応、明治、大正、昭和と生き抜いた木村熊二とは、どのような人物なのだろうか。

二一世紀の令和年代は、生誕百八十年、没後百年にあたることから、改めて彼の人生を辿りその心情を知ることには意義はあると思う。

《木村熊二と小諸義塾に関する資料について》

熊二は慶応二年(1866)から死去する直前の昭和二年(1927)迄の日記を残し、留学中の様子は英文で記されている。熊二と木村家に関する資料は断片的な部分が多く、慶応二年からの日記も所々に欠損があり、特に熊二が創立した小諸義塾に関する記載には欠損が多くある。

これは何らかの理由で記することが出来なかつたのか、故意に書かなかつたのか不明で、日記の中に「別冊に記す」と書かれた期間が数か所あるが、その別冊が遺されていない。

これに関して、明治女子教育研究の第一人者、青山なお東京女子大教授は、熊二と妻燈子が創立した明治女学校の研究の際、「木村家に遺されていた他の文書や資料から較べても、理解できない」と語っている。推測であるが、鏡子の死後に熊二が巖本善治に学校運営を託した際に木村家に関する資料を処分したと思われる。

今までの熊二と義塾に関する研究で参考とされてきた資料には次のようなものがある。

資料①『小諸義塾と木村熊二先生』 小山周次編集

木村先生記念事務所 昭和十一年十月三十日刊

小諸義塾は明治三九年に閉塾しているが、その後卒業生の小山周次が、熊二の存命中の聞き取りを編集し昭和十一年に限定自費出版した。

*「小山周次」 明治十八年〜昭和四二年 水彩画家(一水会) 成城学園講師。

小諸義塾で三宅克己丸山晚霞に師事、義塾卒業生代表として記念事業の幹事を務める

資料②『私立小諸義塾沿革史』 林勇編集

小諸義塾沿革史刊行会 昭和四一年八月三十日刊

*「林勇」明治十九年、北佐久郡平原村に生まれ、小諸義塾から長野県師範卒業後、小諸小学校在職十五年昭和三十八年から四十六年まで小諸市立藤村

記念館長を務める。史料不足を補う目的で関係者に問い合わせたが、新しい史料は発見されなかったと佐久史談会で発表している。

資料③『明治女学校の研究』青山なお 慶応通信社 昭和四五年刊

*「青山なお」青山なお 明治三三年～昭和六十年 東京女子大学教授

梅花女学院教授 東京女子大比較文化研究所で近代女子教育史、明治女学校の研究を行う木村熊二と鑑子の調査では小諸水明楼に遺された資料を基に調査研究を発表している。

資料④『研究紀要集・木村熊二日記』東京女子大学比較文化研究所

東京女子大学比較文化研究所が昭和三四年に小諸市中棚にある旧宅水明楼（現存）に遺されていた、木村熊二関係文書の寄贈を受け、昭和四五年に刊行。昭和四八年に『木村文書分類目録』作成している。

昭和五三年三月「木村熊二没後五〇年展」を東京荻窪の清水画廊で基督教関係者と、遺族である木村・田口両家の協力で開催、その際『研究紀要集・木村熊二日記（Ⅰ）』『昭和五四年に『木村熊二日記（Ⅱ）・（Ⅲ）』を刊行。

資料⑤『小諸義塾の研究』高塚暁 三一書房 昭和六四年刊

*「高塚暁」昭和三年～昭和六二年 東京生まれ、日本放送協会通信教育部、日本放送学園学務部長を務め、論文『ある明治私学人の研究』を発表するが昭和六二年に急死その後畠山滋が第五章までを編集し、『小諸義塾の研究』と題して刊行した。高塚が急死した為昭和六二年以後、木村熊二に関する本格的な研究発表はされていない。

資料⑥『木村熊二・鑑子往復書簡』東京女子大学比較文化研究所 平成五年刊

熊二と妻鑑子が海を越えて交わした書簡を同研究所が纏め刊行した。

資料⑦『校訂増補・木村熊二日記』東京女子大学比較文化研究所 平成二〇年刊

同研究所は昭和五五年再発見された資料を基に「人名索引」を加えて作成している。本書はこの『校訂増補・木村熊二日記』を中心にして、熊二の生涯の考察を進めて行きたい。

現在懐古園入口三之門の左手に「小諸義塾記念館」が建てられている。平成六年にそれまで義塾校舎の一部を移築して使用していた市内の医院が、建物を小諸市へ寄贈したことから、校舎のあった場所に近い、現在地に復元建設して史料・遺品を展示、一般公開している。

《参考とする文献》

⑧『日本基督教団長野教会史』日本基督教団長野教会刊 昭和五四年

⑨ 塩入隆 『信州教育とキリスト教』日本キリスト教新聞社 昭和五七年

⑩ 『長野県下における明治期からのキリスト教徒自由民思想の研究』

『木村熊二と早川権弥との関係』『秩父事件に対する熊二の見解』

東北大学国史談話会雑誌第三〇号 平成一年

『明治初期の旧上田藩士と基督教の受容』

『明治期南佐久農村の基督教講義所』

*北原明文 昭和十一年長野県生れ、東北大学卒

長野高校教諭、清泉女子短期大学教授、県下の基督教に関する論文を信濃毎日新聞に連載、その他にも論文を発表している

⑪ 『明治初期における信州上田の基督教の受容』

早稲田商学同功会・文化論集第三四号 平成二二年

*宮下史朗・矢内義顕

⑫ 『佐久』佐久史談会刊

第二八号林勇 『木村熊二先生と小諸について一、二の考察』

第二九号林勇 『小諸義塾の発端と閉鎖への考察』

第四七号荻原三博 『信州教育と小諸義塾』

*荻原三博 元小諸商業高校教諭 佐久史談会会員。

昭和三四年小諸市中棚の水明楼に遺されていた木村家と熊二の遺品を整理し小諸市に寄贈する際、小諸市教育委員会の委託を受け立会人を務める。昭和五三年「木村熊二没後五〇年展」小諸市側の発起人。

⑬ 『千曲』東信史学会刊

第二〇・二一号大井隆夫 『明治期における新思想の受容』

第一一四号依田四郎 『小諸義塾を抹殺した信濃教育』

第二二五号依田四郎 『木村熊二の困民党に対する見解の一端』

第二二九号依田四郎 『木村熊二の彰義隊敗走記について』

第一七四・一七五号丸山厚至 『東信地方における基督教の受容と木村熊二』

《参考とした書籍》

- ⑭ 藤田美実 『明治女学校の世界』 青英舎 昭和五四年
 ⑮ もろさわようこ 『信濃の女たち』 みらい社 昭和四四年
 ⑯ 並木張 『島崎藤村と小諸』 櫟出版 平成二年
 『小諸時代の藤村』 櫟出版 平成四年
 『島崎藤村と小諸義塾』 櫟出版 平成八年
 ⑰ 小林収 『塩川伊一郎評伝』 龍鳳書房 平成八年
 ⑱ 中野好朗 『信濃の国土岡部次郎伝・疾走する鹿』 第一法規出版 平成五年
 ⑲ 中村勝美 『近代佐久を開いた人』 櫟出版 平成六年
 『佐久の代議士』 櫟出版 平成一年
 ⑳ 田川五郎 『最後の民権政治家 立川雲平』 中央公論 平成二一年
 ㉑ 柏木易之 『御影用水新田陣屋』 木村熊二と柏木新三郎 櫟出版 平成二一年
 ㉒ 大川公一 『青春小諸義塾 サムライ教師と未来の学校』 信濃毎日新聞 平成三十年
 ㉓ 日本キリスト教会 『上田教会歴史資料集』(一) (二) (三) 上田図書館収蔵 平成十三年
 ㉔ 小諸郷友会 『小諸郷友会々報』 「明治二四年七月〜三二年六月」 小諸図書館収蔵
- *岡見璋(頌栄学校創立者岡見清致の曾孫)が作成した摘要集
- ②⑤ 長野県史 『長野県史・近代史料編 第10巻(一)』 『宗教 キリスト教(教団・教会)』
 ②⑥ 望月町史 『望月町史第一編(近代)』 第一章(1)望月の明治維新(四)キリスト教
 ②⑦ 『井口喜源治と研成義塾』 (財)井口喜源治記念館刊 平成二十年
 ②⑧ 『信州人物誌』 信州人物誌刊行会 昭和四八年
 ②⑨ 上原邦一 『佐久自由民権運動史』 三一書房 昭和四八年
 ③⑩ 飯塚道重 『小諸藩歴史散歩』 櫟出版 平成十年
 ③① 塩川友衛 『復刻・小諸繁盛記』 櫟出版 平成十四年
 ③② 島崎藤村 『破戒』 新潮文庫改版 平成十七年
 ③③ 宇佐美 『新宿中村屋相馬黒光』 集英社 平成九年
 ③④ 林勇 『小諸教育五十年史』 信濃教育会出版部 昭和三三年
- ③⑤ 掛川邦男 『島崎藤村の余韻』 文芸社 平成二一年
 ③⑥ 矢島英彦 『寒水伊藤長七伝』 鳥影社 平成十四年
 ③⑦ 日本基督教団小諸教会 『小諸教会百年史』 平成十年
 ③⑧ 高谷達男翻訳 『フルベッキ書簡集』 新教出版 昭和五三年
 ③⑨ 佐野真由子 『クララ・ホイットニーが綴った明治の日々』 臨川書店 令和一年
 ④⑩ 小川誉子 『蚕と戦争と日本語』 ひつじ書房 令和二年
 ④⑪ 井上篤夫 『フルベッキ伝』 国書刊行会 令和四年
 ④⑫ 関根正雄 『人と思想・内村鑑三』 清水書院 平成二六年
 ④⑬ 鈴木範久 『内村鑑三交流辞典』 筑摩書房 令和二年
- 長野県史
 上田市誌
 佐久市誌
 小諸市誌
 北佐久郡誌
- 《Internet》
 『Windows』
 『FADIA』 地域史料アーカイブ

《I》 【生い立ち・幼少期】

〈生家桜井家と仙石家〉

小諸義塾の卒業生小山周次は『木村熊二先生の小伝』の冒頭で「意外である。木村先生が血統の上でも小諸人だといふことは今日まで全く知られなかったことで正に驚異に値するであらう。それは先生の生家桜井家で舊誌整理の結果最近に発見されたといふ新事実に基づく」と記している。

弘化二年(1845)京都で生まれた木村熊二(以後熊二)の生家は、但馬出石藩(現・兵庫県豊岡市)仙石家藩士の桜井家で、その出自は信濃国佐久郡桜井郷の桜井氏とされている。

豊臣秀吉の小田原攻めの戦功により仙石秀久⁽¹⁾が天正十八年(1590)信濃国佐久郡を拝領した時代にその旗下となり、仙石氏が小諸から上田へ移封、その後但馬出石に移封の際にも随伴した家系であった。

但馬出石藩は、宝永三年(1706)信州上田藩から所領五万八千石で秀久から数えて四代目の仙石越前守政明⁽¹⁾の時に移封。政明を初代藩主として七代讃岐守久利⁽¹⁾まで続き八代仙石政固の時に維新を迎えている。仙石秀久には八人の男子が

いたが長男の久忠は盲目の為に検校となり、二男秀範は大阪の陣で豊臣方に参陣した為廢嫡。三男の兵部大輔忠政⁽¹⁾*が家督を相続その後、越前守政俊⁽¹⁾*まで続き、出石へ移封の際には二家を家臣として抱え、他は四つの分家(旗本)が幕末まで続いている。(小泉の矢沢は幕府旗本仙石家の知行地)

仙石氏の上田在城は元和八年から八四年間、小諸時代から数えて信州にいること一六六年間で、一説には小諸から上田への転封は二代仙石忠政が、時の二代將軍徳川秀忠に歎願して実現したとも伝えられている。

幕府の命令で行われた領地替えの際に農民、町人は随伴することは許されず、親族と譜代の家臣に限られ、多くの家臣は新たな領主に仕官するか、帰農する道を選んでいる。(後に熊二の佐久移住を援助した上田龍雄の遠祖は、佐久郡居倉村に帰農している)仙石秀久の佐久郡領有の際にその臣下となったと伝えられている桜井氏が、仙石氏の家臣団の中でどのような地位で随伴していったのかは詳らかでないが、弘化二年生れの熊二から数えて五代遡る遠祖の桜井親房⁽¹⁾が出石藩医師であったとされていることから、文官として登用されていたと思われる⁽²⁾

《仙石家お家騒動と熊二の出生》

仙石家の初代秀久は天正年間に(豊臣秀吉の勘気に触れ所領没収という危機から復活した戦国大名で家臣の多くは、秀久の親族で固められていた。秀久の急死により三男の忠政が家督を継いでいるが、一族内は後継者の問題で常に紛糾していた。上田から出石への入封後も藩内は上田以来の仙石家一門である筆頭家老仙石左京家と勝手方筆頭家の仙石酒造家⁽¹⁾による権力争いが絶えなかった。

出石藩医、桜井親房の四男で儒学者の桜井舟山⁽²⁾*が熊二の玄祖父にあたり曾祖父桜井東亭⁽²⁾*祖父の桜井東門(良蔵)⁽²⁾*が漢学、儒学修め、東門は藩校弘道館の督学(校長)であり本家筋の仙石酒造家の財政顧問的な役割も務めていた。

父石門⁽²⁾*は東門の跡を継ぎ、儒学を学び、藩の勘定奉行という重職に就いていたが、藩内の主導権争いに巻き込まれ失脚している。熊二の生まれたのは京都である。

父の石門はこの時出石藩京屋敷に詰めていたと思われるが、熊二が五歳の時、嘉永三年(1850)五十二歳で死去。(原因は不明) 母親の「栢」⁽¹⁾は叔父桜井泉石⁽²⁾*を頼

り、江戸へ出た文久二年に没している。熊二には二歳上の兄熊一(勉)⁽³⁾とそ
 の上に姉の益(増子)がいた。熊二の養育はこの姉が主に行ったと伝えら
 れている。弟の熊三は生後すぐに近藤家の養子となつている。熊二が出石
 に戻ったのは石門が復職した三歳の時で、それ迄は京都の役宅に寄寓し、
 一時は膳所の農家へ預けられていたと熊二自身が語っている。(4)
 文政七年に熊二の祖父桜井東門が藩の勘定方に抜擢された事に、同じ造酒家の
 仲間から異論があり、暴力沙汰まで引き起こしていた。近年の研究ではこれが幕末の
 仙石家騒動の発端とされている。

この騒ぎは藩主の後継者問題絡んだ権力争いで、七代目藩主の久利*がまだ幼い
 為補佐役の左京家派が藩内の実権を握り、造酒家派の祖父桜井東門は失脚し隠居
 を迫られた。父の石門も京都詰の閑職に追いやられていた。その後此の事件は生野
 銀山に逃げ込んだ造酒派の藩士を、左京派が藩命で捕らえたことが幕府勘定方に
 知られ大騒ぎとなつた。

生野銀山は幕府領で藩役人の権利は認められておらず、そのうえに捕縛された藩士
 が普化宗(虚無僧)であつたことから寺社奉行もこれに関与、出石藩の密貿易の疑い
 あり、幕府勘定吟味方の裁定を受ける騒ぎにまで発展した、

熊二の父石門と叔父の泉石は、祖父桜井東門が勘定方を失脚させられた一連の
 御家騒動の際、幕府領の生野銀山代官所を通じて幕府に訴え一時は江戸へ出て桜井
 家の汚名を晴らす為に行動したと思われる。

天保十四年幕府の裁定が下り出石藩は三万石減らされ所領二万八千石となり財
 政が悪化した為父の石門は藩の勘定方に復職したが、叔父の泉石は儒官への道を志
 して江戸に留まつた。

この仙石家騒動は桜井家と熊二の生涯に大きく関わり、江戸三代御家騒動の一
 つと呼ばれ、歌舞伎や講談の演目になり、後世まで伝えられている。その為に物語
 として脚色された部分や不明な点が多くあつたが、近年はインターネットの活用など
 による研究が進められ、明らかにされた事実も多い。

5

〈木村家の養子・昌平齋寄宿人となる〉

父石門の死後、桜井家は祖父の東門が隠居していた為、長男の熊一(勉)が当主と
 なり、次男の熊二は、嘉永五年(1852)八歳の時、叔父の桜井泉石を頼つて江戸へ
 出た。

叔父の泉石は熊二の祖父桜井東門に係わる一連の騒動の後に、藩を離れ江戸湯島聖
 堂の講師(講師見習)に仕官していた。

熊二はこの叔父の下で儒学を学ぶ為江戸へ出たが、嘉永六年(1853)泉石は四六
 歳で急死泉石とは、永遠の別れとなつてしまった。

安政元年(1854)一月、十歳の時、湯島聖堂都講(教頭)木村琶山(5)の養子と
 なつている。琶山は但州生野銀山の出身、儒学者の出石藩桜井家の事情を充分承
 知しての養子縁組と思われる。泉石と琶山はお家騒動の際生野銀山で知り合つて
 いたと思われ、其の後も湯島聖堂を通じての友人であつた。

熊二は木村琶山の養子となり、十歳の時には湯島聖堂に入学したが安政三年(18
 56)七月養父の木村琶山は二八歳で急死してしまった。琶山死去後の熊二は再び
 叔父のいない桜井家から聖堂へ通学している。(この年の六月に祖父東門も死去)

熊二は聖堂では中村正直(敬字)(6)から漢学を学び、陽明学者河田迪斎(7)の私塾
 にも通いながら昌平齋(昌平坂学問所、後の開成学校・東京大学)へ入学した

河田適齋の妻鎮子は佐藤一斎(8)の娘で、夫の塾に通つて来ていた熊二の祖父、桜井
 東門が、佐藤一斎の門下生であつたことから熊二の境遇を熟知し慈しんでいた。

後年熊二が認めた親類書きを見ると、叔父泉石を父、叔母の繁を母と記載している
 養父の木村琶山が聖堂都講(教頭)であつたことから、学頭である佐藤の一斎の同僚

安積良齋(9)にもついて実学を学んでいた。二に対して周囲の関係者からの期待は大
 きいものがあり、安政五年(1858)十四歳の時には聖堂寄宿人となり、その後助教
 に就いている。日米通商条約が締結され、安政の大獄が始まるという歴史の動乱

期であったが、元服を目前に控えた、今でいえば小学生から中学生にかけての多感な少年期を過し、將に学究の徒であった。

熊二が幕臣に登用されたのは文久三年(1863)十九歳の時である。初の辞令は函館奉行支配役という下僚であったが江戸の生活に慣れ親しんでいた熊二は、未開の地の生活に不安を覚えていたと思われるこれを拒否した。その結果神田小川町の歩兵奉行配下の歩兵隊に配属され、身分は歩兵隊指図役下役八十表高の扶持であった。

『親類書』

木村熊二 当二十四歳

私儀安政元寅年正月 中 木村近之助方江養子相成

父方

- 一、祖父 仙石讚岐守家来 桜井 良藏
 - 一、祖母 右同人家来 桜井 俊藏 娘
 - 一、父 元御普請役 桜井 三郎 死
 - 一、母 酒井雅樂頭家来 宇野久太夫 娘
 - 一、兄 御普請役 桜井 規矩郎
 - 一、伯父 仙石讚岐守家来 桜井 一太郎
- 母方
- 一、祖父 酒井雅樂頭家来 宇野久太夫
 - 一、祖母 右同人家来 酒井八郎右衛門 娘
- 右之外養方親類之分者養父近之助の書付出置申候
右之通御座候 以上

巳五月

木村熊二

木村家にされていた他の史料と一緒に、「巳五月」と記された親類書

熊二が二四歳の明治二年に記したと思われる、叔父三郎泉石を父、実父の一太郎東門を伯父と記している。なぜこのように書いたのか理由は不明であるが、残されている書簡に出てくる縁者・関係者を知る手立てとして貴重な史料である。

【史料3 P.288~289】

【注】

1 仙石秀久(せんごくひでひさ)越前守 天文二年(1552)~慶長十九年(1614)

美濃国加茂郡黒岩村(加茂郡坂祝町)生まれ、永禄七年(1564)、羽柴秀吉の古参の家臣、讚岐を治めるが、戸次川の戦に敗北し改易。天正十八年(1590)小田原戦の戦功により、信濃国佐久郡を与えられる。小諸城は仙石秀久と二代目忠政により構築されている。

*仙石忠政(せんごくただまさ)兵部大輔 天正天正六年(1578)~寛永五年(1628)
秀久三男 小諸藩二代目 元和八年(1622)六万石に増上田藩に転封している

*仙石政俊(せんごくまさとし)越前守 元和三年(1617)~延宝二年(1674)

忠政長男 上田藩二代目 寛文九年嫡男忠俊死去により孫政明に家督を譲り弟政勝に小
県矢沢知行所2千石を分知している

*仙石政明(せんごくまさあき)越前守 万治二年(1695)~享保二年(1717)
政俊の孫 初代出石藩主 宝永三年(1706)6万石で但馬出石に転封している

*仙久利(せんごくひさとし)讚岐守 文政三年(1820)~明治三十年

出石藩七代目藩主 五代久道の十二男 六代政美に嗣子が無かった為家督を相続
これが仙石お家騒動の一因となる。

2 桜井親房(さくらいちかふさ) 出石藩仙石家医師(生年・没年不詳)

*桜井舟山(さくらいしゅうざん) 親房四男 良幹 出石藩漢学者

*桜井東亭(さくらいとうてい) 舟山の甥(川瀬家次男) 出石藩漢学者

*桜井東門(さくらいとうもん) 安永五(1776)~安政三(1856) 通称 良藏

備前岡山近藤惟温 出石藩校漢学者桜井東亭の娘婿となり佐藤一斎に学び享和三年か
ら出石藩校弘道館督学、儒学官を務める

*桜井石門(さくらいせきもん) 寛政十一年(1799)~嘉永四年(1851) 一太郎

熊二の実父、但馬出石藩校の儒学官で藩財政も務めていた。東門の失脚により役職を罷
免され、熊二の出生時は京都詰の役職についていた。その後藩勘定方顧問に復帰している

*桜井泉石(さくらいせんせき) 文化一年(1804)~嘉永六年(1853) 三郎 桜

井東門の三男 熊二の叔父 一連のお家騒動の際は兄石門と共に父東門の汚名を晴らす為に行
動、幕府領生野銀山代官所に直訴、その時木村琶山と知り合いこれが縁となり熊二が木村家の養
子となったと推測されている。

3 桜井(勉)(さくらいつとむ) 天保十四年(1843)~昭和六年(幼名

熊二の実兄、出石藩の儒官、桜井石門の長男出石藩(現・豊岡市)に生まれる。

明治新政府では租税権助に就任。全国の気象測候所の創設を働きかけ気象観測網の基礎を築いた。徳島県知事、山梨県知事 事を歴任。明治二十七年 議員・神宜官員を務め明治三五年に退官、出石に戻り『校補但馬考』を著し、但馬の郷土史研究の基礎を築き、教育振興などに勤める。

4 資料①参照

5 木村琶山（きむらはざん）

中村正直（敬宇）（なかむらまさなお）敬宇（けいう）は号天保三年（1832）〜明治二四年

幕府同心中村武兵衛の長男、嘉永元年（昌平坂学問所入学。佐藤一斎に儒学、箕作奎吾から英語を学ぶ、文久二年）幕府御用儒学官となる。明治六年英学塾「同人社」を創立、文学博士 明治の啓蒙思想家、東京女子師範学校摂理（校長）東京大学文学部教授、女子高等師範学校校長を歴任、

7 河田迪斎（かわだてきさい）文化三年（1806）〜安政六年（1859） 四国高松出身

江戸後期の朱子学者、名は興字は猶興、昌平黌儒学教授尾藤二洲に学び、佐藤一斎の婿となる。嘉永七年（1854）ペリー再来航の際条約文起草。著書に「恵迪斎全集」

8 佐藤一斎（さとういつさい）安永元年（1772）〜安政六年（1859）一斎は号

美濃国岩村藩出身の儒学者、寛政五年（1793）昌平学問所入門。

天保十二年（1841）総長となる。朱子学の門下生は三千人言われ、幕末に活躍した

英才が多数いる。長男、慎左衛門の娘町子は、木村鏡子と田口卯吉の母親で燈子と

卯吉は異父姉弟。鏡子の名前は一斎の命名による

9 安積良斎（あさかこんさい）寛政三年（1791）〜万延元年（1861）郡山二本松 生れ

幕末随一の朱子学者門人は二千人を超えといわれ、佐藤一斎とともに昌平黌教授を勤め、多くの門弟を育てる。ペリー来航時の米国新書翻訳、ロシア国書の返書の起草などに携わる。

《Ⅱ》【青年期・幕臣として維新を迎える】

〈田口鏡子と結婚〉

幕臣として登用された翌年の元治元年（1864）三月筑波山で藤田小四郎ら水戸藩の下級武士が攘夷を旗印に兵挙し日光泰平山連祥院に立て籠った。

この水戸天狗党の乱を制圧する為所属の小川町歩兵隊が出兵。熊二は四月三日から十四日頃まで日光へ出陣した。

天狗党が退いたことで部隊は一旦江戸へ戻ったが、再び筑波山に立て籠つことから幕府は本腰を入れて討伐に向かったがこの出陣に熊二は参加していない。

元治元年五月に幕臣田口耕三たぐちこうざうの娘鏡子とうし（1）との縁談が纏っていたが、歩兵部隊指図

役として六月には幕命により大阪へ出立した。田口鏡子は佐藤一斎の曾孫で一斎が名付け親であった。

熊二が世話になつていた川田迪斎の妻鎮子は一斎の娘で、鏡子の大叔母にあたる。彼女がこの縁談を纏めたと思われ、話を勧める際に実兄の桜井勉と河田鎮子の間で交わされた書簡が残されている。

この縁談は儒学者佐藤一斎を中心にした河田迪斎家と出石藩儒学者の桜井家、湯島聖堂講徒の木村家との繋がりであり、熊二が聖堂に入学する以前から、お互いが儒学者として旧知の間で有ったことで纏っている。

二人が結婚した時には既に佐藤一斎も河田迪斎も この世にはなく、時代は著しく変化していた。熊二（二一歳）鏡子（十八歳）の祝言は慶応元年（1865）五月に行われ、その五日後には大阪へと出立するという慌ただしさであった。

新居を定める暇もなく熊二が上方に向かった為、鏡子は大叔母の河田鎮子の所に身を寄せていた

〈勝海舟との出会い〉

元治元年（1864）京都で起きた禁門の変で、幕府は各藩に対して長州への出兵を命じた。この直前に熊二は徒歩目付となつて、情報活動専門の隊に配属された。

活動の成果を幕閣の勝海舟(2)に報告することになり、京・大阪を往復する情報活動に従事した熊二が、「勝海舟の手付となりて」と語っている。

勝海舟はその後も熊二にとって、師であり恩人である。この時の出会いがなければその後の人生はどう変わっていたのか分からない。熊二の性格をいち早く見抜き、幕府瓦解後の新政府の役人には向いていないとして、教育者となることを薦め、その後の米留学にも理解を示し協力を惜しまなかった。帰国後も折に触れ勝の処を訪ね指導を仰いでいたことが日記から知ることができる。

熊二が遺した日記で最も古い日付は、慶応二年（

八月朔日で、表書きには「慶応四客歳帝都日乗」と記されているが『校訂増補・木村熊二日記』では、他の記載内容を検討した結果として慶応二年の日記と判断している。

慶応二年八月は七月に將軍家茂が大坂城中で死去して、將軍職が慶喜の相続とさまり、長州への出兵を中止するという歴史の大転換期であった。

上司の勝は幕府内で一時、閑職に追いやられていたが、越前福井藩主松平春嶽(しゅんがく)と氣脈を通じていたことから、その連絡役を熊二が務め、八月二十日から京都と福井を往復していた(3)。

明治四十年三月七日から八月五日迄の間、数回にわたり『報知新聞・報知漫筆欄』に連載記事で当時の様子を投稿している。『報知漫筆』、新選組隊長近藤勇についての記事も掲載している(4)。

そこには熊二の終生変わらなかつた信条が綴られ、討幕派を浮浪の徒と呼び、その取り締まりが主で、桑名や会津の藩士、見回組隊士、新撰組の近藤勇らと、盃を交わしながら情報を得て、その対策を講じたと記している。

熊二の一貫した新政府に対する見方は幕末の激動の中で醸成されたといえる。討幕派を浮浪の徒と呼び、その取り締まりが主で、桑名や会津の藩士、見回組隊士、新撰組の近藤勇らと、盃を交わしながら情報を得て、その対策を講じていた。

徳川の体制が永久に維持できるものとも思つてはいなかつたが、衰えて行く体制のなかでも精一杯の行動をとることが儒教と朱子学の教えであるとしていた。

御証

徒歩目付 木村熊二

一、人足式人

一、馬式疋 但人足四人三代ル

一、御用物持式人

御小人目付
荒井録三郎
田中平次郎

同断

一、馬一疋宛

但老疋八人足二人三代ル

大津駅ヨリ雇人足式人

右者京都詰御用相済明後十日当地出立、東海道通、帰府候間書面之人馬当晩七半時可差越候此外余斗馬切」差出不申宿々無遅滞継立尤川越え渡船場等差支無之様手当可申付候、則御証文写並休泊割旅宿付共別紙之通差遣申候 此先触早々継送り至江戸湯島天神下手代町桜井規矩郎宅江可被候

以上

十月八日

田中平次郎 印

從京都

東海道通

品川宿迄

右宿々問屋役人中

(5) 木村家に残されていた史料美濃大判厚紙を横長に二つ折りで、折ったままの裏表に認められている

文書に書かれている荷物の送り先の桜井規矩郎とは、叔父三郎泉石の子で従弟にあたり、規矩郎もこの時は御普請方として長州討伐部隊の京都詰であったが、熊二より先に江戸へ戻っていたことが解る。

〈大政奉還と祐吉の誕生〉

江戸へ戻った熊二は下谷生駒前の徒歩屋敷を新居とした。生駒前は徒士組長屋と呼ばれ多くの徒士が住んでいた。徒士組長屋の一角には昌平覺の師である田辺信次朗が息子の田辺太一(6)と共に家塾を開いていた。昌平覺時代から熊二はこの塾にも通っていた。

開国が決まると幕府役人・外国奉行として随一の語学力と知識を有していた田辺の塾には、諸藩の有能な若者や旗本の子弟が学んでいた。尺振八(7) 新島襄(8)と面識を得たのも此のころで、熊二に海外に目を向けさせた塾である。徒士長屋の隣家

には乙事太郎乙(9)など同僚も多く住んでいた。

小川町歩兵隊に所属した熊二は、小十人格銃隊指図役勤方で禄高は百俵五人扶持であった。五人扶持とは一日玄米二升五合、一ヶ月七斗五升の扶持で、知行地を持たない御家人の木村家は切米で支給されると、これを換金していた。

熊二は約十五両の換金扶持で、主が不在の木村家は鑑子の手元に渡ると一旦鑑子が預かり、前借金を清算して鑑子に渡すというやりくりをしていた。

既に幕府徳川家の経済は逼迫していた為、家臣への月々の手当金も遅れがちで鑑子は夫婦にとつての恩人であった。熊二も初めて家庭という落ちつく場所を得たが、生駒前の徒士長屋での新婚生活はわずかな期間でしかなかった

徒歩目付探索方として、江戸の治安と特に討幕派の情報収集活動では勝海舟の配下であったと伝えられているが、当時の熊二の行動は不明で日記も残されていない。慶応三年十月徳川慶喜十五代將軍は京都二条城で大政奉還上表を朝廷に提出し將軍職の辞職を表明。これに対し朝廷は王政復古を宣言した。

熊二と鑑子との間には慶応四年(1868)二月長男祐吉が生まれている(10)。

〈彰義隊へ参加〉

錦の御旗を前面に押し立てた東征軍が江戸へ迫りくると、江戸の街を戦火から守るために奔走したのが、上司の勝海舟で、江戸城無血開城を成し遂げる為に奔走、東征軍総監西郷隆盛と会談したことが伝えられている。勝は自身の人脈を使って情報収集したがこれに熊二も加わっていたと思われる。

勝と西郷の会談の影の立役者は山岡鉄舟(11)とも云われ、山岡と勝は同じ幕臣で、江戸城が無血開城となった直後、熊二は海舟から山岡と会う事を勧められたと語っている。維新後に会って話した記録は明治三年渡米直前の十一月二二日で、帰国直後にも訪問している(12)。

勝と山岡が官軍と交渉し、平和裏に江戸城の無血開城を決め、將軍慶喜は恭順の意を示したが、これに不満を持った幕臣の一部が、彰義隊を結成して上野東叡山に立て籠った。

明治三九年七月二二日の報知新聞・報知漫筆欄に『危機一髪』と題して熊二が当時の様子を投稿している。この時海舟の配下である熊二は立場上表立った行動はできず、自身が所属する部隊の仲間が彰義隊に参加していることから、仲間の為に食糧運搬などをしていただけと思われる(13)。

彰義隊の構成は二千人から三千人と伝えられているがその実数は不明で、上野戦争と呼ばれるこの戦の死者も、二百名から五百名とされ実態は未だに分かっていない。彰義隊について研究を進めている、大蔵八郎が『新彰義隊戦史』を勉強出版から、令和二年十一月二〇日に刊行している。

熊二に関する記載は、徒歩目付・出石藩京都詰役の身分で所属は「純忠隊」となっている。彰義隊の主力部隊は旗本八万旗と呼ばれていた徳川家の旗本、御家人で、そこに各藩の在府の武士を中心に諸隊を組織して加わっていた。しかしその実態は旧態依然とした武士集団で、最新式兵器を備えた官軍によって僅一日で制圧されている。しかも戦闘が始まる以前に、その火力を知ると敗走するものが続出していた。

残されている資料や元隊士の証言から、熊二の所属した純忠隊は、浜田藩(島根県)の士族が九五名で結成、八名が戦死、八十名が国元へ帰り謹慎処分となっている。それ以外は脱走あるいは脱藩者とされている。

〈横浜から静岡へ〉

徳川家は慶応四年の彰義隊事件(上野戦争)後、新政府からの命令で当初百万石で存続されるはずであったが七十万石に減らされ、駿府(静岡)への移封を迫られた。幕末の時点で徳川家の 財政は、八百万石で運営されていたが幕臣に対して三つの条件を布告、その去就の選択を求めた⁽¹⁴⁾

田口家の旗本株は佐藤一斎が所有していた。河田家、木村家は幕府の儒学官で地位は旗本同格、将軍に拝謁出来る御目見えの位であったがこの布達で身の処し方に苦慮した。

下谷生駒前の木村家にはこの時、妻鏡子と生後まもない長男祐吉、鏡子の実家、田口家の祖母、可都、母の町子、異父弟で元服したばかりの田口卯吉⁽¹⁵⁾が同居していた。

一、朝臣トナル者ハ安堵被仰付事是ハ幕府ヨリ賜リタル邸地、知行或ハ禄高ハ其ノ儘下賜セラルルナリ。

一、帰農スル者。是ハ幕府ヨリ下賜サレタル邸地、知行、禄高ハ一切朝廷へ上納シ、或ハ農トナリ、或ハ商又ハ工ト為リテ自活すべし。

一、無禄移住者。是ハ幕府ヨリ下賜セラルタル邸地、知行、禄高ヲ一切朝廷へ上納シ、更ニ駿遠ノ新領地へ移住スベキ事。但シ後々勤メ居ル者ハ扶助料ヲ賜ル。

官軍は江戸に入ると治安維持のため警備を強化、宿改めと称して、佐幕派旧幕臣の搜索を始めた。京、大阪で幕府探索方として活動していた木村熊二の名前は、官軍の薩摩、長州、土佐藩出身の兵士の間で知られていた熊二はこの布達が出る以前から身の危険を感じ、家族にもその居場所を知らせていなかった。勝からの指示があったと思われるが、熊二は家族と共に江戸を離れることを模索していた。

避難先を選んだのは神奈川条約で開港したばかりの横浜で、以前は寒村であったが埋め立てにより既に外国人居留地が造られ人口が増えていた。

この横浜関内に入れば長崎の出島と同様、隔離された場所で、官軍の手も及ばないと考え下見に出かけた。

同行したのが小川町歩兵部隊の幕府講武所師範外山忠兵衛^{とやまちゆうべ}で、後に熊二の米国留学を誘った外山正一^{まさかず}(16)の父である。隣家の乙事家や徒士長屋の同僚達も移住先を探していた。

木村家と田口家が横浜に移住を決めた理由は、横浜惣年寄で保土ヶ谷宿本陣の荻部清兵衛が田口家の知人であったからと言われている。戊辰戦争はまだ終結せず北越、会津、函館へと戦火が広がっていた為、江戸から多くの人びとが新開地の横浜へ逃れてきていた。

最初は田口家の祖母可都、母町子、義弟卯吉が関内の太田町へ、鏡子と祐吉は根岸村に分散して転居したが食糧不足と治安が悪化し、根岸村がよそ者の入村を禁じたことから太田町の借家に田口家と同居することになった。

鏡子は荻部清兵衛の好意で炭、薪、煙草、卵などを販売する雑貨屋「いよや」を始めた。横浜での生活は決して楽なものではなく、家主の大田屋平三郎と交渉して、借家の一間をまた貸して家計の不足を補い、義弟の卯吉は外国人居留地の骨董店の手伝いで収入を得て米国人宣教師タムソン宅で英語の習得を始めていた。

河田一家も江戸を離れ、^{ひろむ}熙、^{たけし}熙兄弟⁽¹⁷⁾もこの塾へ通っていた。木村家は慶応四年六月中旬には横浜への転居を終らせたが、新政府からの布達に対して熊二は五月の段階で、出仕を拒否し徳川家と共に駿府への移住を決意していた。

勝海舟の遺した日記には『乙事太郎来訪。軍事掛付、中根酒造次郎、片山直太郎、木村熊二、乙事太郎乙(中略)駿府へ御供願ひ度く旨申し聞る』(慶応四年六月二五日)とありこれを承諾している。

勝海舟が初めて駿府を訪れた日付は、元号が改められた明治一年十月十二日で幕臣の移住状況の視察と徳川家達への挨拶であった。これより先に熊二は単身で駿府に移つていたと思われる、役職は軍事掛付であった。

静岡藩の軍事掛は全員が沼津在勤で責任者に、元小川町歩兵部隊の上司、藤沢長太郎志摩守が着任しているが、記録を見ても熊二は沼津の軍事掛には配属されていない。

明治九年十月二四日付の在米中の熊二に宛てた長男祐吉からの書簡に同封されていた書付が残されている。

祐吉の記した文章を鑑子が補正した跡が見られる。この記載に依れば一時は静岡藩庁の役職に就いたが、明治二年に沼津兵学校に留学し員外生となっている⁽¹⁸⁾。横浜で同居していた田口卯吉は無禄であったが、下谷時代からの熊二の友人乙事太郎乙の好意で、藩士の育成方に就いた乙事太郎乙が、沼津兵学校教授となったことから、明治二年沼津兵学校附属小学校に入学した。

沼津兵学校は幕府が諸外国から、日本の独立を維持するための組織的様式訓練を行う、士官養成を目的に設立されていた。開校直前に幕府が瓦解した為、明治一年十二月に静岡藩が開校していた。

駿府に移住した旧幕臣三十歳以下の者三百余名を選び、兵学校入学の為の予備科を設け素読、算術、作文等を課した試験を行い百名を入学させた。熊二は二五歳で資格は有していたが、合格後の修業年限が四年であったことから員外生となった。

沼津兵学校員外生とは旧士族への授産制度で員外生には修業年限がなく、洋学と数学を専攻することができ、軍人になる規定もなかった。

兵学校はその後明治五年に新政府の陸軍学校となり東京に移転されている。

七〇万石に減らされた徳川家の家臣達には厳しい現実には直面していた。

大井川流域の牧之原から三方ヶ原にかけて茶畑の開墾は、この時入植した彰義隊の残党八十名を含た三百人を超す旧幕臣たちの手により行われている。

この開墾を指導したのが勝海舟で、勝は母、妹を静岡に残して東京と行き来していた。新政府への出仕を選んだ同輩もいたが、熊二は横浜に家族を残したままで静岡に移り、一度は単身で沼津へ移った。

最終的には明治二年の一月に駿府城北東の草深町に住いを構えたものと思われる。員外生としての授業で外国事情を教えられ、より深い英学の学習が必要と痛感させられた。

〈留学を決意〉

静岡深草に移住した木村家は、熊二と鑑子、長男祐吉、田口家の祖母可都、母町子の五人で、卯吉はすでに沼津兵学校の資養生となっていた。

明治三年の静岡藩職員録には「書籍取締り出役」と記載され、高百俵五人扶持受け

11
ていた⁽¹⁹⁾。

静岡には下谷生駒前の徒長屋に住んでいた同輩昌平鬯関係の知人とその家族が移住、新婚時代に鑑子が身を寄せていた河田家も移住して来た。河田兄弟は横浜の居留地の英国人から英語学んでいたが、長男熙(貫之助)は静岡県少参事となり、徳川家達の補佐役を務めていた。彼は母鎮子に自身の経験(文久三年の渡欧使節団の副使)から「徳川宗家に忠を尽くす為には外国を知るべきだ」と語っていた。河田の六男の英之介もすでに米国へ留学中で、熊二と入れ違いに帰国している。

熊二と共に横浜を探索した外山忠兵衛一家も静岡に転居して来た。息子の正一は慶応四年に英国への留学を経験し、帰国後は静岡学問所に奉職していた。

新政府は帰国した留学生の新知識を日本近代化に活用する為、留学奨励策を金沢、鹿児島、名古屋、静岡など十五の藩に通達した。

明治三年十月外山正一は新政府から呼び出され、森有礼少弁務公使⁽¹⁹⁾の秘書官として渡米することが決まり、数名の留学生が同行できるといふ情報を伝えた。

この情報に熊二と大儀見元一郎⁽²⁰⁾は早速、上司の勝海舟を訪ね渡米を懇願した。

勝は熊二がこの時に、目的を失い何をして生きてゆくべきか一切の方向を見失い、茫然自失の状態であることをすで見抜いていた。二人が尋ねた時城内の破屋に住み、家具もなく茶箱に布をかけて書き物をしていた『海舟日記』明治三年十月十八日。

木村家と田口家の状況は承知していたが、以前から熊二の性格を知っている勝は、渡航費や滞在費よりも、家族との話し合いがどこ迄進んでいるのか質問した。

これに対し熊二が、「三年という期間であり、妻鑑子も留守中の心配はない」と答えただけから協力を約束している。

静岡藩からの留學生の人選では旧藩士の序列問題もあり、熊二に対して一部から異論が出た。理由は以前に藩庁から権少属任命の辞令が交付されたがこの辞令を破り捨て、出仕を断ったことが原因であったが、時の静岡県大参事が、山岡鉄舟であったことが功を奏し、留学が許可されたものと思われる。

勝が藩内の上層部と掛け合い、旅費として六百両を三人(もう一人は曾谷元成で英国へ留学、帰国後は外務省に出仕、熊二と同じ船には乗っていない)に渡したのが十月十八日の夜である。渡された金は半ば公金であつて、熊二は私用の金の手持ちはなかった。

留学資金の不足を外山に相談すると、外山は官費留学で、給与も支給されることか

ら。「俺の俸給を分ければ渡米後は何とかなる。旅費の不足分を俺が加藤弘之^{かとうひろゆき}②から借り来る。後で返せばいいだけのことで、金のない我々の志に快諾してくれるだろう」まで言つて留学を薦めてくれた。加藤は外務大丞として外山の上司であり、熊二と同郷でもあることからの発言で、実際に外山が借りたかは不明である②。

その後、静岡藩の留学生として渡米した熊二と大儀見に対し、文部省の留学生としての官給を考えた勝は、旧幕臣達を通じ文部省、外務省と折衝した。

勝の周旋により明治四年十一月正式に公費留学生として認められ、静岡県から学費が支給されている③。

徳川幕府の瓦解を目の当たりにして、人生の行き場所失っていた熊二に、米留学という思いもなかった道が開かれた。

此れ迄の人生は実父の死、頼りにした叔父と養父の相次ぐ急死。その都度、自分で決断する間もなく、周囲の取り決めに応じてきた熊二の人生で、初めて自己の決断で決めた米留学という、未知の世界への旅立ちであった。

夫の留学に対して、当初は驚きと不安から返答を迷っていた鏡子は、周囲の話を聞き、長男祐吉と祖母の可都、母町子を守る事を決心して、励ましの言葉をかけて来た。束の間の新婚生活、根岸から横浜へと転居、殆ど主が不在の生活、やっと安住の地を得た思いであろう鏡子に対して、労いの言葉をかける間もないほどの慌ただしさであった。

熊二にとって心残りといえれば長男祐吉の成長を見届けることが出来ず、裕吉には父親が不在という境遇を作ってしまったことである。

静岡の鏡子の周囲には、下谷でも隣家であった乙事太郎乙はじめ中村正直、外山正一、大儀見元一郎など熊二の旧昌平黌関係の知人とその家族、鏡子にとっては親代わりも同然である河田家の人々がいた。外山家をはじめ留学者の家族たちは共同で手紙を発送し、来信での消息を知らせ合うなど支え合つて生活していた。

その中心的存在で面倒を見ていたのが勝海舟で、出発前に熊二は鏡子に対して、かあつたら勝海舟と山岡鉄舟に相談するようにと言ひ渡していた。

日記には『(表紙欠)明治庚午三閏十一月』とあり。十一月十八日から二九日までが残されている④。

明治三年十一月十九日に静岡を出達した。前夜家族と別れの宴を張り、その夜は外山正一の家に宿泊、翌十九日の払暁三年の留学とされているが心の中では、再び日本の土は踏めないという覚悟の旅立ちであった。

東海道を進み箱根を越えて、二二日には保土ヶ谷に宿泊、二二日早朝、横浜湾を外国船が汽笛を鳴らし航行する景色を見た時、將に時代が大きく動いていることを実感した。

尊王攘夷、開国反対と騒いでいたのはつい三、四年前の出来事で横浜だけでなく、神奈川の宿も昔と違い活気を呈していた。自分が拠り所としていた幕府瓦解後の横浜を目の当りにし、開港による貿易が今の日本にとって必要な政策であり、海外思想の輸入でもあると考えた。

一体異国とはどんな国なのか、旅立ちを前に一抹の不安を感じていが、江戸に入り上野の永昌寺に眠る養父木村琶山の墓に花を捧げ、渡米の報告をした時に、和魂洋才への脱皮を決意したと後に語っている。

十一月二六日には同行する森有礼公使に挨拶に行く迄の間に出石藩邸を訪れ実兄勉への書簡を託した。小川町歩兵部隊時代の同輩を訪れ、一度は不在であった山岡鉄舟と面会して留学への感謝の意を伝えている⑤

明治三年十二月三日四時三十分横浜港から米国船グレート・リ・パブリック号に乗船、一路サンフランシスコへ向かった。

【註】

1 田口鏡子(たぐちとうこ)嘉永元年六月二六日〜明治十九年八月十八日

佐藤一斎の子慎左衛門(田口家・養子)の娘田口町子と耕三(嘉永四年死去)の娘として生れる。町子は西山樞郎と再婚(長男卯吉と田口家(養子)するが安政六年樞郎が死去、卯吉とは異父姉弟新婚生活の間もなく、祖母可都、母町子、長男祐吉と共に主が留守の木村家を守り、基督教徒として帰国した熊二の影響から明治一五年・Gフルベッキから受洗。

明治一八年、熊二と念願の日本人による女子教育を目指した「明治女学校」を開設するがコレラに罹患して死去している。

2 勝海舟(かつかいしゅう)文政六年(1823)〜明治三二年幼名麟太郎 号は安房 旗本

安政の改革で才能を見出され長崎海軍伝習所で学び、万延一年咸臨丸艦長で渡米、帰国後海軍奉行陸軍総裁を歴任。幕臣として徳川家存続に尽力し江戸城無血開城の立役者。

維新後は新政府の参議海軍卿、元老院、枢密顧問官を務め伯爵となる。

熊二の上司で師であり最大の理解者である。勝海舟の存在がなければ熊二の人生はあり得なかつたといつても過言ではない。

3 資料⑦—P2〜5

4 資料⑤—P333・34

*白野夏雲、耕作(しらのかうん)甲府白野村出身 元・甲府徴典館学々頭

小川町歩兵部隊岩瀬肥後守配下の同僚、維新後は北海道で殖産生活をする。熊二は、この奇偉な人物の事を『報知漫筆』『報知新聞・明治四十年三月七日』に書いている。

5 資料⑤P・39

6 資料③P・321〜322

7 同

8 田辺太一(たなべたいち) 号は蓮舟(れんしゅう)天保二年〜大正二年 幕臣儒学者

田辺石庵の次男長崎海軍伝習所で学び、幕府外国方随一の語学力を持ち文久の幕府使節団、パリ万博派遣使節明治三年の岩倉遣欧使節に随行している。新政府外務省大書記官、元老院議官を務める、晩年は福地源一郎(桜痴)と共に往古の幕府内情の語り部として知られている

9 尺振八(せきしんぱち) 天保十年〜明治十九父は高岡藩医鈴木伯寿

文久元年、幕府遣欧使節に福沢諭吉と翻訳方として同行。明治元年神戸米国公使館通詞 明治三年共立学舎を創設。明治五年大蔵省翻訳局長、田口卯吉・嶋田三郎らを指導。

10. 新島襄(にいしまじょう)天保十四年〜明治二三年 安中藩士、幼名七五三太(しめた)

江戸屋敷で生まれ軍艦操練所で洋学を学び漢訳聖書に出会う。元治元年函館から米国へ密航、ボストン上陸米国で基督教徒となる。明治五年現地で岩倉使節団に参加木戸孝允の通訳として欧州を巡回。明治八年アメリカンボード日本通信員(宣教師)として帰国、京都に同志社英学校を開校。明治十六年群馬安中教会設立、第三回全国基督教徒大親睦会に幹事として参加。明治二十一年徳富蘇峰らと『国民之友』を発刊 同志社大学設立、明治二十三年大磯にて死去。

11. 乙事太郎(おつことたろうおつ)天保十三年〜大正十一年江戸の生まれ

蘭学医「杉田玄白」の曾孫、蕃書調所御用役、開成所(後の東大)教授 外国奉行調査役維新後沼津兵学校英語教授、大蔵省翻訳局勤務後、尺振八と共立学舎を開く、明治十一年海軍省御用係、国家「君が代」提唱者で作曲者フエントンに文意を教えている

12. 資料⑥P・442所収

13. 山岡鉄舟(やまおかてつしゅう)天保七年〜明治二年 通称鉄太郎

幕臣として清川八郎と共に浪士組新選組の前身)を結成、江戸無血開城の立役者 明治新政府では静岡藩権大参茨茨城県参事侍従、宮内大丞。義兄高橋泥舟と勝海舟の幕末三舟と呼ばれた。

*高橋泥舟(たかはしでいしゅう)天保六年〜明治三十六年 旗本山岡家に生まれ鉄舟は義弟、

講武所師範として将軍慶喜の警護を終生務める。

14. 資料⑦P・6

15. 資料⑫129号依田四郎 『木村熊二の彰義隊敗走記』

16. 大野虎雄 『沼津兵学校とその人材』昭和十四年五月刊

17. 田口卯吉(たぐち、うきち)号は鼎軒(ていけん)安政二年〜明治三八年熊二の義弟。

旗本田口櫻郎の死去により家督相続、幕府瓦解後は祖母可都、母町子、異父姉木村鏡子と共に横浜(転居、米国宣教師タムソンから英語を学び、沼津兵学校では乙事太郎乙に師事、静岡病院で医学研修、共立学舎で学ぶ。明治五年から大蔵省翻訳局、紙幣局に勤務、其の後著述業に転じ、同十年『日本開化小史』を刊行。十二年に『東京経済雑誌』を創刊。明治十三年から二十三年まで東京府議會議員。実業界では明治二十三年南洋交易商會を組織、両毛鉄道社長、小田原電気鉄道取締役となる。明治二十七年から明治三八年まで衆議院議員、憲政党を創設。『国史大系』『群書類従』の編纂に尽力

18. 外山正一(とやまさかず)嘉永元年(一八二〇)〜明治三三旗本外山忠兵衛の子 幼名捨八、十六歳で開成所教授。慶応二年幕府派遣英国留学、明治元年帰国静岡学問所勤務、明治三年森有礼外務省弁務官秘書となり木村熊二と一緒に渡米、ミシガン大卒 東京大学初の日本人教授・総長貴族院議員、文部大臣を務める。明治教育文化の指導者として英文学教育では、小泉八雲(シフカディオ・ハーン)を招聘している

*外山忠兵衛 外山正一の父、旗本幕府講武所剣術指南役小川町歩兵部隊では熊二の同僚

19. 資料③—P245「鑑から熊二の書簡 明治元年十月から十二月」

20. 河田熙(かわだひろむ)天保六年〜明治三三年 河田迪斎長男 通称貫之助 外国奉行支配頭、文久の年渡欧使節の一員となる。帰国後は開成所頭取、目付から維新後は静岡藩少事その後徳川家達の補佐役となった

*河田熙(かわだたけし)天保十三年〜大正九年河田迪斎四男

昌平塾教授方から外国奉行支配役、維新後静岡学問所教内務省地理局では桜井勉と共に

『皇国地誌』編纂に携わる、帝国大書を経て吉田東吾と、日本歴史地理研究会を立ちあげ研究成果を従弟にあたる田口卯吉の『東京経済雑誌』に連載

21 資料③ P.256

22 資料⑥ P.412

23 森有礼(もりありのり)弘化四年(明治二二年)薩摩藩士、森喜右衛門の五男

慶応元年薩摩藩留学生として英国留学ロシヤ視察後、慶応三年に米国を視察、新興宗

トマスハリスト教団に所属、明治元年帰国後外国官権判事、明治三年少弁務使として外山

正一、大儀見元一郎木村熊二をともしない渡米。任務は米国との外交事務と留学生の管轄

で米国代理公使を務める

24 大儀見元一郎(おおぎみもといちろう)弘化二年(昭和十六年)旗本、本姓は丸茂

卒業時は、卒業生代表として英語、日本語、ラテン語でスピーチを行う。帰国後は日本基

督教会・麹町教会牧師となる。明治二四年ステイール・アカデミー東山学院長を務め、

長崎教会を経て、アメリカ・メソジスト・プロテスタント教会に移籍。名古屋英和学院で教

鞭を執る、美普教会牧師として麻布、浅草小石川に教会を設立している。

25 加藤弘之(かとうひろゆき)嘉永二年(1828)大正六年、但馬出石藩家老家、長男

藩校弘道館で学び江戸で佐久間象山に師事、蕃書調所でドイツ語を学ぶ、維新後外務

大丞明六社設立に参加、東京大学総長、元老院議員、貴族院議員、日本最初の文学博士

26 資料⑤ P.65

27 同 P.116

28 資料⑦ P.6

一ヶ年

木村熊二

留学年中為学費書面之通被下候事

辛未 十一月 静岡県

〈静岡県からの留学費支給の写し〉

《Ⅲ》維新の動乱を生き、留学生として渡米

〈米国への留学〉

小諸義塾で熊二から教えを受けた小山周次は、熊二が渡米する際「佐倉定吉」という偽名を使用したと記しているが、同行した森有礼の『渡米日記』に佐倉定吉の名前はなく、木村熊二と正式に書かれている。

この船には三十七名の日本人乗客がいた、そのうち十八名は独逸へ、北白川宮能久親王が随員を従え留学の為乗船し西園寺公望以下五名が英国。米国へは十四名で上等船客二十九名、下等船客八名、熊二と大儀見は勿論下等船客で曾屋元成は乗船していない。

公卿、華族、米沢藩主の弟、大学東校の医学生、それに森有礼等の日本初の米国在外公館員一行と多彩な高位高官の顔ぶれであった。

熊二の遺した書類に佐倉定吉名の日英仏で記載された、パスポートが残されているが、その他『知己人名録』という冊子も残されている。記載の日は不明であるが、森有礼に関しては「鹿児島の人、米国に与を伴いたる人なり、洋行中常に愛顧せり」とある。

外山の名前もそこに記されていることから、熊二の留学の許可が下りたには、当然外山が森の許可を得ての事で、森は熊二が偽名を使っていることを承知していた。

新政府の役人の中には戊辰戦争直前まで京・大阪で幕府探索方の活動をしていた木村熊二の名前を憶えている人物がいるかもしれない、問題視されることを恐れて、偽名を使用したとも考えられるが真偽のほどは謎である。

森有礼の職務は「亜米利加二行シ交際事務及被国留学生徒管轄委任」と自筆の『渡米日記』に記している。新政府の奨励策により留学生が多く渡米していたが、中には目的なしに遊興気分でも米国に渡った者も多く、不評を買っていた者も少なくなかった。留学生管理の為に森を条約締結後、日本が最初に設置した在外公使館の初代表として派遣した

熊二も乗船するまで、ぶらりと米国見学旅行程度に考えていた節がある。しかし船上で多くの人々と会話するうちに、その甘さに不安を覚え始め、上陸と同時に物見遊山の気分は吹き飛んだ⁽¹⁾。

明治三年十二月二七日船はサンフランシスコに到着、上陸後は森、外山と別れ、今後の身の振り方を考えるという今では考えられない行動である。海舟からは「何か困ったことがあれば息子の勝小鹿と連絡を取れ」と言われてきたが言葉も解らず、所持金も減って不安が募るばかりであった。(2)

偽名を使用した。パスポート写真

佐倉定吉 午式拾三歳

明治三年庚午十二月三日

日本国外務卿沢三位清原宣嘉 花押

〈木村熊二鑑子往復書簡〉

熊二と大儀見は最終的にミシガン州ハーランドに落ち着く事になるが、そこまでの経緯とその後の熊二の留学生生活を知る資料として、妻鑑子と交わした書簡が遺されている。

当時の郵便事情からその内容に前後の違いが起きている個所もあるが、是は日本から熊二の処に届くまで、書簡は渡米する知人に託され、公使館を通じ米国内の郵便に依頼するなど、かなりの時間要していた為である。

サンフランシスコ到着直後の十二月二八日付の書簡が鑑子の手元に届いたのは翌年の二月二八日で外山正一の家族から届けられたと記されている(3)。

熊二からの返信も船便の数により、日本への便が制限されることもあり、纏めて到着して鑑子の手元に届くまでに同じ留学生や、知り合いの渡航者の手を経て届けられたりしている。

日米間の郵便物交換は明治五年三月から横浜、神戸、長崎にあった米国の郵便局の間で行われ、明治六年に米国との間に郵便交換条約が結ばれ正式に実施された。国際郵便が自由に交換されるのは明治八年万国郵便連合に日本が加盟してからで、この事情から熊二渡米初期の郵便物は弁務公使館経由であったと思われる。

本書で資料⑥としている『木村熊二鑑子往復書簡』にはこの期間の熊二宛の書簡、

15 明治三年十一月～十五年一月迄の五八通と鑑子宛の三二通が収められている。

慶応二年から記している熊二の日記、資料⑦は渡米直前の明治三年十一月の一月と明治四年八月十四日から十月十四日まででは日本語で記載されているが、それ以後は残されていない。明治十四年二月から十五年五月までは英文での記であるが、金銭の出納と簡単なメモ書きにすぎず、当時の熊二の様子を知ることができない。帰国後に牧師として、なぜ神に仕えるようになったのかを説教の中で語るとき、留学時の経験も語っている。『聖書之研究』(4)に掲載された「めぐみの旅路」(明治三三年十二月から八回)でも語られているが、纏った資料は残されていない。

〈ミシガン州ハーランドへ〉

明治三年十二月二七日サンフランシスコ着。ここでは数人の日本人と会い、河田英之介(丞)の消息を尋ねたが既に熊二と入れ違いで帰国していた。

明治四年正月元旦サンフランシスコ出発、前年の五月に開通したばかりの、大陸横断鉄道でニューヨークに向かった。ニューヨークには四日間滞在したが、ニューヨークの物価が江戸・横浜の倍もしていることに驚いている。出発前の勝海舟の指示もあり、

熊二と大儀見はニューブランズウィックの勝の息子小鹿の所を訪ねた。ニュージャージー州・ニューブランズウィックにはラトガース大があり、すでに日本人留学生が数名いた。

勝小鹿から連絡を受けて、ニューヨークへは勝の娘婿の目加田種太郎(5)が来てくれた。

目加田は静岡県の出身で日本人初のハーバード大学への政府留学生。身分も学資も保証され、熊二より年下の十八歳であったが、以来親身になって相談に乗り、熊二と大儀見の世話を惜しまなかった。金銭に余裕がない二人はブルックリンの安宿に移つてもよい手立てはなく、最後の手段として、ワシントンにいる外山正一と相談する為目加田がワシントンへと向かった。この時外山は不在で、福地源一郎(6)が加わり鳩首すれども名案は浮かばず、その為米国に来てすでに三週間近くたっても留学先が決まらない二人に対して、現地の日本人の間からは旅費を募って日本に送り返そうという話まで持ち上がった。

熊二はニューブランズウィックに戻っていた勝小鹿に、もう一度協議してもらおう為に目賀田がそちらに向かうと手紙を出した。目賀田は勝と相談の末ニューヨークに外山も一緒に来るように電話を入れた。

外山は留学を勧めた手前もあり、上司の森にニューヨークへ行く許可を得る為に事情を説明した。

その結果、森が外山に熊二と大儀見の面倒を見るように指示したと思われる、ニューヨークのホテルで目賀田から説明を聞いた内容が熊二の手紙に記されている。

『目賀田事、所々かけあるき種々骨折処、不斗正月二十一日ニューヨークに而ドク

トル、ヘルプスと申人と出逢候よし(中略)政府より人選にてミシガンという地方、
ハーランドなる一村を此人へ預け人民を教育為被致候(後略)』(7)。

米国への日本人留学生の多くは、アメリカリフォームド教会派遣の宣教師、G・Hフルベッキ(8)の紹介でニューヨークのリフォームド教会外国伝導局のI・フェリスの息子で総長J・フェリスの世話になっていた。

『フェリス和英学校六十年史』によるとフルベッキの紹介でJ・フェリスの所を訪れた日本人は五百人以上で約半数が、このニュージャージー州・ニューブランズウィックのグラマースクールか、ラトガース大学へ入学していた。

森とフルベッキは以前の信頼関係があり、森からの後押しでJ・フェリスに目賀田と外山が相談を持ち掛けと思われる。

この時はハーランドのヘルプスが所用でニューヨークに滞在していたので、J・フェリスと目賀田がヘルプスに対して、熊二と大儀見の実情を説明した。ヘルプスは元々がリフォームド教会の牧師で、ミシガン州ハーランドにあるホープカレッジの校長でもあったことから、二人を引き受けることが決まったと思われる。明治四年一月二二日にヘルプスと面会。ミシガン湖の南東岸シカゴから北東約二百キロにある、ミシガン州のハーランド(向かう事になった。二日後熊二たちは蒸気船でバドソン川を下り、翌朝ニューヨークの北二百キロにある、ジョージア州のオルバニーというヘルプスの故郷に着いた。ヘルプスはオルバニーに所用で数日滞在する為、二人は別行動で列車と乗合馬車でハーランドに向かうようにヘルプスから告げられた(9)

〈ハーランドとヘルプス一家〉

ヘルプスは英語のできない二人の為に一通の手紙を書き熊二に持たせ、困ったことがあったらこれを見せればハーランド迄の案内をしてくれるだろうと説明した。

途中乗り換えがあるからと二人の荷物を、他の乗客たちが見てもハーランドのヘルプス家に着くように目印をつけ車中での食物まで用意しており、乗客たちも馬車の中で二人を歓待し、身振り手振りで案内をしてくれた。一月二八日に出発し三十日にはハーランドに到着した。

すでにヘルプスから連絡が入っていた為に、ホテルの主人はじめ学生たちが出迎えてくれた。その中にはハーランドで最初の日本人留学生津川良三(10)の姿があった。津

川は岩国藩の公費留学生として熊二たちより一足早く留学していた。

熊二たちが辿り着いたミシガン州ハーランドは、徳川幕府が長崎の出島を使って海外交易を続けていたオランダ人が多く居住している地域であった。

1620年のメイフラワー号により新大陸のボストン・プリマスへ上陸以来、欧州各地からの移民が入植、その多くはプロテスタント(新教)の信徒達で、彼らは母国オランダ国教会に背を向け、植民地では、オランダ改革派(アメリカンリフォームド)教会を設立していた。

当時の米国は南北戦争後で再建の時期といわれ、合衆国北部の奴隷解放勢力の勝利により、ハーランドのある北部地方ではプロテスタントが大きな広がりを見せ、このハーランドは合衆国有数のオランダ移民によるクリスチャンコミュニティと呼ばれていた。

鎖国時代の日本人にとって異人とはその殆どがオランダ人で、彼等から学ぶ学問を「蘭学」と呼び日本人が海外の事情を知る唯一の手段であった。

開国後もオランダとの交流は続き、特に米国のオランダ人は東洋で最も身近な民族は日本人であるとして接していた。熊二を快く受け入れてくれた人々は、このハーランドに入植したダッチと呼ばれるオランダ系移民達であり、その殆どがオランダ改革派の信徒であった。

到着したばかりの二人に、ヘルプス夫人が子供を連れて訪れ労いの葉をかけてくれた。夫人は、「英語を早く覚え、学業が身に就くまで日本の家族の事は忘れなさい、私たちの家を自分の家庭と思ひ、遠慮なく何でも申しなさい」と励ましてくれた。

ヘルプス一家には三人の男子がいた。二歳の男の子が物怖じせず、よく回らない口調で歓迎の言葉をかけてきた時、思わず祐吉を思い出し胸が熱くなった。熊二はこの時の様子を詳細に書簡に書き送っている⁽¹⁾。

ヘルプスがオパールから帰って来て、これからの学習の方法について話し合った。

まず何といつても英語を身につけねばならず、ヘルプス夫人と子供達特に三男が英語学習の手持ちを持って来て、良く回らない口調でABCの読み方、書き方を教えてくれ、カレッジの先生や生徒も熊二たちを招いて歓待し、会話に困らないようにと指導をしてくれた。ヘルプス一家は敬虔な基督教信者で、その日課は朝六時起床、夜は十時就寝と決められていた。熊二が風邪をひいて二日ほど寝込んだ時は夫人が見舞いに訪れ「夜更かしが一番体に悪い」と叱られた時この一家の真の優しさを強く感じた。

夫のヘルプスから託された二人の日本人の将来については、彼女なりの一つ考え方があり、後の熊二の基督教への入信についてもこの夫人からの強い勧めであったと思われる。

渡米後の日本語で記入された日記は明治四年の八月から十月迄が残されていて、其れを見ると八月になって眼病を発している。

熊二は留学中を通じて、眼病に悩まされたことが鑑子への書簡に度々書かれている。この時は余りの頭痛の激しさに津川を訪ねて通訳を依頼して医師に診てもらった。

津川が長州藩出身ということで当初は接触を避けていたが、彼の陰日向のない親身な世話にホームシック気味であった熊二の心は和らぎ、日本での懐古談に花を咲かせたりしたこと九月には快方へと向かった。

このハーランドの気候は寒暖の差が激しく、熊二の体質には厳しいものがあり、挫けそうになる気持ちを奮い立たせたのは、妻鑑子からの手紙で、読み返すたびに祐吉に会いたい気持ちは募り、その姿はヘルプス家の三男と重なり心が揺れた。静岡で生活の為に機織りに専念する鑑子の姿を想像し、慕情の念に駆られることもあったが、返信には弱気の一片すら見せていない。生後すぐに肉親と離され、叔父と養父の相次ぐ死と直面し、家庭という温かさは時代の変流で僅しか味わうことのできなかつた熊二の心の強さを観ることが出来る。

〈ホープカレッジ入学〉

明治四年十月熊二と大儀見はホープカレッジ付属のグラマースクールに入学した。日記を見ると

「此日演習開場脩師命我等四阪二命ズ買地理算術書」とあるが「四阪」の意味は学年と思われ、日本の小学校低学年と同じと推測できる。

数日後に付近で山林火災が起き、学生はじめ住民全員が消化にあたったが熊二は病み上がりということで、気を使ったヘルプスからの命令で参加を止められた。こんな処にも周囲が熊二達に気を使っていたことがわかる。

八月から十月までの日本語で記された日記の最後に、ヘルプスから外山の手紙と五ドルを手渡されたとある。「金がなくなったら俺の給与で暮らせばよい」とまで言ってくれた、外山正一の給与の一部であったと思われる、その友情には感謝するしかなかった。

外山は在米中に外交官を辞職。明治五年ミシガン大の留学生となり明治九年に帰国している。

熊二の留学中の最大の出来事は基督教への入信である。これについて熊二に関心のある多くの人によりその契機が語られているが、熊二の受洗(基督教徒となる為、洗礼を受ける)は、明治五年六月で按手者(洗礼を授けた牧師)はホープ教会のA・T・スチュアートである。

前掲「めぐみの旅路」にはこのハーランド在住の八年間で熊二が記憶に残ったことが綴られ、ヘルプス一家の親切には語り尽せないとしている。

英語を習得するために朝晩熟読した聖書の世界から、それ迄熊二たち日本人が知り得なかつた基督教の道へと進んだことがわかる。ヘルプス夫妻も時と共に、熊二には人間としての優しさと強さがある事を垣間見て、基督教への入信を薦めたことも事実である。

熊二がヘルプス一家との生活で接した聖書の教えにある「神の言葉の実践」を初めて行つたのが津川良三との友情である。津川は長州岩国藩の留学生として一年早くハーランドに来ていたがホープカレッジ入学以来、金銭的に苦しくなっていた。

その為ヘルプスがニューヨーク東部の教員会に津川への支援を呼びかけ、募金の中から生活費を支給していた金額は明治二年から五年にかけて五九三ドルにも達していた。

ハーランドに來た直後に眼病とホームシックになつた熊二を親身になつて接してくれた津川に対して、もはや長州人だからと言つて敵対感情を持つことは許れないという気持ちになつていた。

熊二はヘルプスに預けておいた四百ドルの学費の中から百ドルを津川に与えた。

是こそが聖書の精神を自ら実践したことになり、熊二の態度を冷静に觀察していたヘルプス夫人が、受洗する事を強く薦めたと思われる。(12)

熊二が基督教徒となつた背景には、儒教で培われた民族主義者の一面が強くなり、日本人としての自覚的行動を追い続けていた事も見逃せない。

熊二の異国人に対して物怖じしない態度にはヘルプスも驚嘆していた。

或日ヘルプスが熊二に向かつて、「ハーランドから三十分程のグラントラー・ベツツの農家に、日本人の労働者が働いていると聞いて自分が行つてみたが、言葉が通じない上、日本人とも見えないが君が行つて確かめてくれ」と言われた。さらに「もし日本人なら連れて来てくれ、金銭に係わる事なら当方で全て面倒を見る」と言われて赴くと、

確かに日本人で名前は松田為常^{たかね}(13)という男で友人によつてこの農家に農奴として売られてきた事がわかつた。

松田は元薩摩藩士で渡米の経緯はよくわからないが、当時は日本脱出を図ろうとする士族の中には横浜、神戸で外国人商人の甘い口車に乗り、留学とは名ばかりで農奴として米国に売られてくるケースがあり、しかも、そこには多かれ少なかれ日本人が介在していた。

後年大蔵大臣として昭和十一年の二・二六事件で犠牲となつた高橋是清は、若いころ英語を習いたいが為に横浜商人の口車に乗り、慶応四年米國オー克蘭で支那駐米大使の息子の家に召使として売られ、その売値が三ヶ年で五十ドルだつたと自伝に書いている。

熊二は日本人が日本人を売るとは絶対許せない行為で、まして農奴としてアメリカ人から非人道的な扱いを受けるとは日本人のプライドが許せなかつた。

しかも松田は三ヶ月一銭の給料も貰わずに働かされていたと聞き、この農家の主人に「ミシガン州の法令を盾に問い詰めて詰問した。するとこの主人は「今日の処は五ドルを渡す」というので熊二は「その金は本来松田に支払う金で私がもらう金ではない、私は今からこの問題で友人の処へ向かう途中である。」(14)

彼に対するこのような無礼な振舞いは到底許せるものではなく、馬車を一台出して送るのが当然だ」とやり込めた。

松田を連れてハーランドに戻る途中、ホープカレッジのラテン語の教師モオンダイキ氏の処を訪れ一泊して事の顛末を説明してからハーランドに戻つた。松田は熊二がホープカレッジを卒業するまで、アルバイトをしながら在学していたが、其の後いつ頃帰国したのか不明である。

モオンダイキ氏は本来イギリス教会の名望ある牧師であつたが、一時期ホープカレッジでラテン語の教鞭を執つていた、熊二に限らず日本人留学生に対して懇切な指導をしていた。語学の習得に時間を取られがちな熊二達に対して、留学のもう一つの目的である見聞を広める事を薦め、博覧会の見学などには自腹を切つて引率するなど協力を惜しまなかつた。

ハーランドはオランダ人が入植した農業地帯であるが、すでにミシガン湖沿岸には蒸気機関を利用した工業地帯が出現していた。グラマースクール卒業後の進路を決めかねていた熊二と大儀見にとっては英国人のモオンダイキの指導こそ天の導き・神の恵みであつた。(14)

家族と約束した留学の年限は三年であつた。熊二と大儀見はグラマースクール(年限は三年)に入学するまで半年を要した。留学生の多くはそれ以前に蘭学を学び、短期間であつても国内で外国語、特に英語を学んで留学していた。

熊二は生駒前の田辺太一に蘭学の手ほどきを受けていたが田辺自身が開国後はオランダ語だけでは国際社会に通用しないと痛感し、英語を学び私塾で教えていた。蘭学の基礎があれば英語の習得は比較的早い、二人にはその経験が少なく、英語の習得に予想以上に時間を要した。三ヶ年の留学ではグラマースクール(現在の小三年生程度の就学)で帰国することになる。

維新直後の海外留学生の殆どは、帰国後の就職、役職が約束されていた。だがその当てのない熊二達は、このまま帰国しても就職のあてはない状態では年限を延長せざるをえなかつた。

明治六年の学制公布で政府は維新後奨励していた海外留学に実質的な規制を加えた。新政府の財政上を理由に各国の弁務公使に対して「毎月の学業の検査により、学習効果のない者は帰国させ、私費留学の官費留学への切り替えを制限、官費留学を大蔵省の管轄下にする」と通達した。(15)

熊二と大儀見の留学は勝海舟の静岡県と新政府への周旋、根回しにより実現した留学で、専攻科目も不明確、学業成績も向上していないとみられ帰国命令対象者であった。

鏡子は手紙で帰国何時になるのか問いていたが熊二が明言を避けていた為、鏡子は役所に呼び出され、質問されたが返答に困惑していた。

〈自費留学生への切り替え〉

明治六年九月熊二の所に在米臨時代理矢野次郎から帰国命令の通達が届いた。

既に津川が帰国して文部省の試験を受けた。その成績は英文が九問中五点、ラテン語十問中三点、算術六問中二点、という惨憺たるもので、熊二より語学が堪能な津川にしてこれでは熊二が受けてもその成績は推して知るべしであった。(16)

鏡子の手紙は、再三帰国について問いかけているが、もう一つ難問として祐吉の教育についても困惑している様子が記されていた。父である熊二への記憶は僅かしかなく、女手だけでは無理があることを切々として訴えている。家計の足しにと始めた機織りについても、周囲の静岡へ移住していた士族達が東京や他所へ移住する者が多くなってきたことも記している。

木村家の生活を見守っていた勝一家も新政府への出仕で静岡を引き払っていた。

義弟の田口卯吉は、沼津兵学校資業生から静岡病院医学修習生となり共立学舎入学その後、明治五年には大蔵省翻訳局に採用され、翌七年には大蔵書紙幣局に出仕していた。すでに二十歳となり俸給三十円が約束されたことから、東京小日向水道端に、一家を呼び寄せ同居した。(17)

主が不在の木村家の生活に気を配っていた実兄桜井勉も、明治五年に内務省へ出仕し租税官となり、四国松山の大多事から東京へ移る際も静岡を訪れ、鏡子を激励し書簡でも相談に乗っていた。

熊二の基督教入信に対し田口卯吉は快く思わず、兄桜井勉は明らかに反対、妻鏡子は沈黙であった。留学の際、静岡県からの学費支給の誓約書には「他国の人別に加はり候事、並宗門相改候儀堅く御禁制之事」と記されていた。

新政府は明治元年「五榜の掲示」に宗教の自由を宣誓しながら、実態は旧幕時代の禁教であった基督教の解禁を認めていなかった。これには諸外国からの猛反発を受け、明治四年の岩倉具視の欧州使節団は訪問した国々で批判を受け、慌てて明治

六年旅の途中に急遽新政府に指示、国内のキリスト教禁制の高札を廃止した。

一緒に留学していた大儀見元一郎はすでに自費留学生に切り替えていた。津川良三は帰国を決意、外山正一は外交官を退職しミシガン大へ留学がく決まり、入国直後、東奔西走して世話をしてくれた目加田種太郎は帰国後、留学生監督官として再度渡米していた。

熊二は、自費留学生に切り替えることを決意、熊二と大儀見のホープカレッジ予科入学は明治八年で終了課程ではそれぞれが英語のスピーチを行い、本科を卒業した明治十二年には、日本語、オランダ語、英語を駆使し、卒業のスピーチをしている。

辛未(明治四年)十一月静岡県より洋銀四百元請取候也
壬申(明治五年)文部省より同四百元請取候也
葵酉(明治六年)半年分同省より請取候也

和紙の小紙片に鉛筆で記した覚書

静岡県貫属士族 木村熊二
学制改革二付帰朝申付候事
明治六年七月十八日 文部省 印

静岡県からの通達書の写し

この通達以降は、私費で滞在したので覚書の金額は政府から受けた留学費の総額と思われる。(18)

〈ニューブランズウィック神学校入学〉

基督教が解禁されたとは言えまだ日本には定着しておらず、国内にはプロテスタント(新教)以外のカトリック(旧教)の各教派も進出していた。本格的に教勢を広げるには日本人の牧師、宣教師が必要となっていた。オランダ改革派宣教師として早くから日本で活動していたフルベッキとヘルプスは旧知の間柄でフルベッキはこの時一時帰国してハーランドを訪れていた。

二人は帰国後の熊二と大儀見に、日本でミッシェンの一員となる話を持ち掛けその条件を満たす為に神学校へ進むことを提案した。

自費留学の二人にとっては無償で進学でき、場合によっては給費生の道も開かれていることから、ニュージャージー州にあるニューブランズウィック神学校への進学を決めた。大儀見はホープカレッジ卒業後、一時は理学を志したがチフスに罹患、時期を逸していた為、熊二と共に神学校に進むことを決めた。この神学校はラトガース大学の付属校で、ラトガース大には維新以来多くの日本人留学生が学んでいた。熊二と大儀見は明治十二年九月からこの神学校で学ぶことになった。留学生活も十年近くなり熊二は三十五歳を迎えようとしていた⁽¹⁹⁾

〈帰国と周囲の期待〉

熊二はハーランドで多くの人々から数々の支援を受けてきた。このニューブランズウィックでの三年間で最も忘れられない恩を受けたのがモーレイ一家である。

ダビット・モーレイ⁽²⁰⁾は、御雇い外国人教師と揶揄されていたが、明治六年から五年間文部省の招きで日本に滞在、日本の教育制度制定に関与していた。夫婦には子供がなく、ミセスモーレイが親身になつて接してくれた。

彼女が中心になつて信徒から寄付金を集め、熊二の学費と生活費の面倒を見てくれた。ダビット・モーレイは熊二達が米国に留学していた期間の日本の状況を伝え、これからの日本人に何が必要なのかを彼の意見として語ってくれた。話を聞かされたさすがに留学期間が長すぎたこと、帰国を躊躇することもあった。

既にミッシェンとの間で日本の通信員として帰国することを約し、金銭的に余裕も出たので、宣教師の資格を得る為だけに三年間を無為に過ごすことを良しとせず、ニューヨーク大学医学部で研修を受け、マスターオブ・アーツ(修士課程)を取得した。

ニューヨークで親しくなった、領事館の高橋真吉から卒業後は領事館勤務を誘われ、幕臣から外務省に出仕した駐米大使の塩田三郎からは外務省に勤める事を薦められていた。鏡子の書簡では一日も早い帰国を懇願され、義弟の田口卯吉は帰国後、政界へ進出することも良しとし、兄勉は医学を学んでいることを喜んでいて。

その頃、神学校の寮の一室で深夜ベッドの中でふと思いついたのは、留学直前の時、すでに同輩の多くは夫々に身を処していたがやっと思いついたのは、勝海舟の処を訪ねた帰り路に、友人から聞いた勝の独特の言い回しの言葉があった。

「木村や大儀見は後に残されてしまっている、厄介にはならんが、まあ以前から勉強だけは良くしている。まず教師にでもなつた方がいだろう」。

大儀見とはサンフランシスコ上陸以来ずっと同じ道を歩き続けてきた将に生涯の友といえる付き合いが続いていた。帰国に際してはミッシェンとの手続の関係で大儀見とは別々の船便になった。

明治十五年六月一日ニューブランズウィック第一リフォームド教会から聖職任命を受け、正式にオランダ改革派教会伝導局派遣牧師の身分となった。

サンフランシスコから英国船アラビック号に乗船。明治十五年九月二日、横浜港に到着した。木村熊二、数え年三七歳の秋を迎えていた。⁽²¹⁾

【注】

1 資料⑤ P.84・85

2 勝小鹿(かづこ) 嘉永五年〜明治二五年 勝海舟嫡男 海軍軍人幼名小六(ころく)

慶応三年米国ラトガース太留学、アナポリス卒。明治十一年海軍大尉任官、海軍兵学校で乗員指導 病気がちの為、明治二四年予備役編入、男子がなく徳川慶喜の十男、制を婿に迎へ、「勝」家を継いだ

3 資料⑥ P.34〜35

4 内村鑑三(うちむらかんぞう) 万延二年(1861)〜昭和五年 高崎藩士 江戸で生まれる。

明治十年東京英学校から札幌農学校でW・Sクラークの薫陶を受けメソジストとして受洗、農商務省勤務後私費で渡米アーマスト大で伝道師の資格を得る。明治二四年一高教員時代に不敬事件を起こす。萬朝報記者理想団設立『聖書之研究』創刊、非戦論と無教会主義を貫き通し、熊二とは終生の友人である

*『聖書之研究』明治三三年十二月から「めぐみの旅路」と題し熊二の留学生活と基督教に入信した契機などを八回にわたり掲載している。

5 日賀田種太郎めかたたねたろう(嘉永6年〜昭和1年)旗本 江戸に生まれる

妻は勝海舟の三女逸子十六歳で静岡学問所掛 明治三年米国ハーバード大卒後明治八年再渡米日本人留学生の監督世話掛となる。明治十三年専修大創立東京芸大の創立に尽力。

貴族院議員 国際連盟大使 枢密顧問官を務める

6 福地源一郎(ふくちげんいちろう)天保十二年(明治三十九年、通称桜痴(おうち))

長崎蘭学医の長男 安政九年海軍伝習生、文久遣欧使節に随行、明治四年岩倉視察団の一等書記官として渡欧明治八年「東京日日新聞」創刊、明治のジャーナリストとして演劇、文化と幅広い活動を行う

7 資料⑥ P-287

8 G.H.フルベッキ(ギド・ヘルマン・フリドリッヒ・フルベッキ) 1830〜1898明治三十一年

オランダ出身 1852年22歳で米国に移住、米国オランダ改革派教会の宣教師として

安政五年長崎から入国、佐賀藩校、開成学校、明治女学校で教鞭を執る、

熊二が宣教師となる契機を作った人物、各地を伝導し小諸義塾でも講演をしている。

9 資料⑦

10 津川良蔵(つがわりようぞう) 元岩国藩士

ホープカレッジでは日本人最初の留学生、熊二、大儀見と一緒に受洗

帰国後は横浜共立女学校で教鞭を執っている。

11 資料⑥ P-281

12 資料⑤ P-

13 松田為常(まつだためつね) 弘化二年〜昭和三年 元薩摩藩士、

渡米の時期は不明薩摩出身の森有礼、松方正義と親交があり

帰国後、第一高等学校で教鞭を執り、野球を始めて日本に導入

した人物とも云われている。

14 資料⑤ P、

15 (石附実著)『近代日本の海外留学史』P-165)

16 資料⑤ P102〜117

17 資料⑥ P-

18 資料⑤

19. 同

20. ダビット・モレイ 1830年〜1905年 アメリカ出身 教育者、ラトガース大カレッジ教授

明治六年から文部省顧問として東大、東京女子師範(お茶の水大)の設立に関与、学制改正を手掛ける 明治十一年に帰国、夫人と共にニューブランズウィックに戻っている

21 資料⑤

《IV》【十二年間の留学からの帰国】

〈下谷教会牧師・木村熊二〉

明治新政府は慶応三年王政復古と共に神祇官を復興し、神道を国教とする政教一致の政策を執った。これは仏教排撃政策であったことから、東西本願寺を中心とする仏教徒の反撃に会い、政策の変更を余儀なくされた。

明治六年「邪宗門禁制」の高札が撤去され、基督教の勢力が徐々に強くなると政府は基督教勢力排除のために神道と仏教の調和を図ろうとして 仏教勢力を味方にする為に、神祇省を教部省と改名、教導職を置き神仏混合政策を取り始めた。

これにより仏教勢力だけが急速に強くなり、慌てた政府は明治十年教部省を廃止、翌十一年には各県に政教分離の通達を出して信仰の自由を布達した。

その結果神道勢力は衰退し、仏教と基督教の信徒獲得の争いに発展していた。

熊二が帰国した明治十五年は、前年に政府高官による官有物払下げ問題に端を発した「明治十四年の政変」で政界は混乱していた。松方財政によるデフレ政策は農村の疲弊を招き、庶民の救いを求める信仰心は仏教に集り、旧来の檀徒制度による組織的な信仰になっていた。

この組織化の障害とされたのが基督教で、仏教に関した新聞などは「仏法の敵、第一なる耶蘇教」と喧伝した。民衆のキリスト教を邪宗とする宗教観には根深いものがあった。

明治維新前後の若い士族たちの多くは、英語を学ぶ為に、開港直後の横浜や神戸の宣教師の所で基督教に触れていた。しかし基督教の教義を理解しても、信徒になる者は僅であった。基督教を国教としている諸外国は日本に積極的に宣教師を派遣した。新政府も多くの若者を留学させたが、出国時の誓約書には、「他国ノ人別ニ加ハリ候事、並宗門相改候儀堅ク御禁制之事」と明記していた。

留学先で基督教の教義を学んでも、帰国後に政界や官途に就いた多くの若者達は知識としての基督教は理解しても、信仰を続けるものは少なく、帰国後は外国人宣教師とは距離を置いていた。

十二年に渡る留学生活から帰国した熊二は、周囲の誘いを断り、基督教指導者の道を選んだ。

明治十五年九月二日に横浜に到着、鏡子と祐吉が同居していた東京牛込山伏町の義弟田口卯吉の家で旅装を解いた。卯吉は既に、乙事太郎乙の媒酌で山岡千代と結婚、大蔵省を退職し著述業に転身、「自由新聞(自由党創刊)」記者の傍ら『日本開化小史』の出版を手掛けていた。この出版事業に鏡子が手伝ったことが彼女の才能も開花し、その功績は大きなものがあり、自ら進んで参画していた。

木村家は九月十七日に「下谷区初音町式丁目式番地」の一戸建を借り転居、家賃の一ヶ月八円五十銭は当時としては安くはなかった。

明治十六年九月駒込西片町十番地の新築した家に移る迄の一年間を過ごした。駒込の地所は実兄桜井勉家と接した、約千坪の土地で、自宅の他に塾生の為の家も用意した。

帰国直後の心情を「官途に就く機会があったが、旧幕の遺臣は、もはや明治の世には無用」と語り。徳川の恩は決して忘れず「武士としての矜持」を終生持ち続ける事を決意し、恩師である勝海舟の助言から、教育者としての道を選んだ。

帰国後、家塾を開き十月には三名の書生が訪れていた。以降の日記を見ると、授業の様子は「常如」とあつても、訪問者、面会者の多さに如何に忙しかったが判る。

基督教関係者は勿論、旧幕時代の知人の名前も見られ、長男祐吉も塾生の一人として学びながら同居、鏡子と一緒に塾生達の面倒を見ていた(1)。

帰国後初めての正月を迎え、家族一同初めて落ちついた新年を迎えたことが記されている。『十六年一月癸未元旦、屠蘇ヲ飲ミ新歳ヲ祝ス賀客蝟集田口ト一酌終日在遇(略)』(2)。

明治十六年四月から下谷教会の牧師としての活動が忙しくなった。

下谷教会は植村正久(3)が明治十一年に創立したプロテスタントン教会で熊二は帰

22 国してからは、日曜以外にも講義をしていた。前年の明治十五年十二月三十一日の教会で鏡子と祐吉は再来日したフルベッキから受洗(洗礼を受ける事)して正式に基督

教徒になった。

熊二の身分は、米国オランダ改革派伝導機構(アメリカン・ダッチ・リフォームド・ミッション)の派遣牧師であつたが、伝導機構が参画して日本基督教一致教会が設立されたことで、正式に日本基督教一致教会下谷教会第二代牧師に就任した。

この教会で、最初に熊二が行った按手礼(洗礼を授ける儀式)を受けた若者が、出石出身で熊二と鏡子の人生に大きく関わる巖元善治(4)で、木村家の親族をはじめ熊二の周りの多くの人が、この下谷教会で入信している。熊二は明治十八年三月までこの教会に籍を置いていた

〈第3回全国基督教信徒親睦会〉

帰国した熊二の所には多くの基督教関係者が訪れていた。遠来の訪問者も多く、鏡子は急な宿泊などにも快く応対し、塾生たちが揃って出掛ける時には、早朝から弁当を作つて彼らを送り出していた。下谷教会信徒親睦会の会場の交渉も彼女が責任をもつて当たっていた。

熊二を訪ねてきた人々は旧徳川家臣と基督教界の人士に分けられるが、その多くがプロテスタント(新教)の関係者であつた。

明治十五年十二月塾の講義が落ち着いてきた頃、熊二の所を奥野昌綱(5)頻繁に訪れ来た。奥野は旧幕臣で、上野彰義隊戦争の時は輪王寺宮付小姓として東北まで逃走、流浪後は横浜で外国人宣教師たちに日本語を教えていた。その後日本人最初の基督教職試験に合格し、按手礼(洗礼を授ける資格)を持った最初の日本人宣教師で明治十三年四月に完成した新約聖書の翻訳に携わってきたが、引き続き旧約聖書の翻訳を手掛けていた

新約聖書の翻訳は外国人教師と外国人宣教師達を中心になつて完成したが、奥野は、旧約聖書を日本人だけによる翻訳で行い、「日本人翻訳の聖書で日本人牧師が布教する基督教」を目指して、熊二に協力を求めて来た。

日本国内の基督教伝導はバンド(仲間の意)と呼ばれる組織により推進されてきた。その多くは徳川幕府の開港による地域で生まれ、その後は基督教を教える教育機関

のある地域でもバンドと呼ばれるグループ形成していた。横浜バンド、神戸バンド、熊本バンド、札幌バンド、仙台バンド等が知られている。

明治政府の宗教政策はその都度変更され、基督教信者はそのたび増減を繰り返して、熊二が帰国した時期には伸び悩んでいた。

明治十一年、日本各地に広がっている基督教徒とその指導者が、教派を越えて東京に集まり親睦を深める目的で「第一回全国基督教徒大親睦会」が東京築地新築橋教会で開催され、議長に津田仙が就任、中村正直の「文学と基督教」と題した講演が盛況を博した。

第二回は明治十三年に大阪梅花女学校で行われていた。熊二が帰国後、最初に大勢の信者や基督教指導者との交流の場となった。

「第三回全国基督教徒大親睦会」は明治十六年五月八日から五日間に渡って開催され、会場は築地新築橋教会の他に、久松座(明治座)でも行われ、全国三十人の各派の教会から関係者が集まり代表者の演説が行われた。

熊二は第三日目に、「人々万物ノ零」と題して講演を行った。

この大会が契機となり基督教関係者の間では今も語り継がれている「リバイバル(覚醒)運動」の時期を迎えた。最終日の明治十六年五月十二日鈴木真一氏の写真館で撮影した幹部と参加者の集合写真が残されている。

へ上州から信州への伝導活動

第三回全国基督教徒大親睦会の活動報告で最も評価されたのが群馬県の高崎・安中地域における伝導活動であった。安中は新島襄の出身地で安中教会の牧師は、新島の薫陶を受けた熊本バンドのメンバーえびなだんじょう海老名弾正(6)で、今回の信徒大会では幹事を務めていた。

群馬県内は東京、横浜に次いで基督教徒が多く、安中教会は明治十六年、年間九十人の受洗者(洗礼を受け信者となる人)を出し、安息日(日曜の礼拝)には二百名ちかい信徒が集まるといふ盛況ぶりであった。群馬県議会は当時の廃娼運動の高まりから、明治十五年四月の議会に於いて、明治二十一年六月までに県内の遊郭廃止を決議していた。

群馬県富岡には日本最初の官営富岡製糸場が置かれ、日本各地からの女性達が就業し、産業・文化の先進地でもあった

高崎を中心にした西群馬地域の基督教を更に拡充させる為の伝導には熊二が担当することになり、帰国して最初の東京を離れての伝導活動であった。

明治十六年七月五日から群馬県高崎を拠点に伝導を開始、八月三日に東京へ帰還した。この伝導には星野幸多こうたが同行していた。星野は群馬県沼田出身の二三歳の若者で、当時はミッション(伝導機構)が横浜に設立した「先志学校」の助教を務めていた、この伝導活動により、高崎に画期的な無教派でミッションに頼らない自給自足の西群馬教会を創立した中心人物である。その後も横浜海岸教会の牧師として上田、佐久地域で伝導を行っている。

熊二が高崎に拠点を置いて活動していたことが判る、錠子と交わした書簡が残されている。

七月八日付から十日・十九日・二十四日・八月一日の四通があり、高崎に仮寓していた熊二への宛先を見ると「上州高崎越後屋源平方二」とあるが、七月二十四日からは「上州高崎田町六三番地岡本彦八郎方」と宛て先が変わっている(7)。

この時は未だ蒸気機関の鉄路は開通しておらず。梅雨もまだ明けていない東京を夜中の一時に出発、鉄道馬車に揺られ熊谷を目指し、高崎に着いたのは六日の午後四時、出発から十五時間半を要していた。高崎の信徒達は熊二の講演、説教に大いに感激した。

高崎の豪商岡本謹吾おかもときんごは県会議員であり、第三回信徒大会参加者の湯浅治郎とともに群馬廃娼運動の立役者であった。安中の信徒で倉賀野の松本勘十郎は、製糸会社塩光社を経営する地元の素封家で、群馬の女子教育の先駆となる前橋英和女学校(明治二二年上毛共愛女学校と改称)の初代校長となった人物で、熊二に高崎に永く留まってくれることを願ったが、熊二にはこの伝導活動ではもう一つ、信州への宣教という目的があったことを日記に「略」辞氏之厚意而約後一周信州之地方而再帰高崎之意、氏許可之焉(略)」と記している。

信州からの帰りに再び高崎に寄る事で氏の了解を得た。その後も松本との交際は続き、明治十七年二月二六日からは熊二が単身で高崎への伝導に向かい、五月十七

日には西群馬教会設立を成功させている(8)

明治十七年二月二五日東京での会議は、議長に熊二が就任し、美以派(メソジスト)の津田仙、組合派の海老名弾正小崎弘道、蔵原惟郭おざきひろみち くらはらいひろ。改革派のフルベッキ、巖本善治の他、各派から選ばれた九人の委員による協議が行われた。その結果どの教派にも属さない無教派教会の設立を認め、その運営は牧師を中心に長老、執事による役員会、又は教会員の合議制で運営を図ることを確認した。

西群馬教会の設立資金は、隣町原市の信徒で養蚕業の半田宇平次と、高崎の岡本金吾が五百円の基金を拠出、会員からの千五百円を得て運用されていた。

群馬県で基督教が広がった背景には、この地方の養蚕・蚕糸・機織り、という近代日本の輸出の花形産業による活気と、安中藩出身の新島襄を始め海老名星野等の、蚕糸業の豪商や豪農の中上層グループへの啓蒙によるところが大きく、新島が故郷に蒔いた基督教の種が開花したといえる(9)。

東京からの鉄道の敷設は、熊二が高崎に滞在中の明治十六年七月二八日に熊谷迄が仮開通した。群馬県内は明治十八年に高崎・横川迄が開通、明治二十一年には長野・軽井沢間が開業し、群馬・長野間の最大の難所の碓氷峠が馬車鉄道からアプト式になったのはさらに五年後の明治二十六年である。

この後東京から度々小諸、佐久を訪れることになるが、その度に東京からの鉄路が改良され、時間が短縮されていた。

〈初めて小諸を訪れる〉

明治十六年七月九日熊二と星野は、午前十時に高崎越後屋を出発、十一時半安中に到着。休む間もなく鉄道馬車と人力車で碓氷峠を越えて軽井沢に到着している。十日は夜来の雨が揚がりきらない早朝五時半に宿を出発。雨による悪路を沓掛村から追分を経て小諸に到着した。

熊二が小諸に一泊したのは偶然ではなく、桜井家の遠祖は上田から但馬出石へ仙石家に随伴していった信濃武士が出自で、主家筋の仙石氏が信濃で最初に領主となったのが佐久郡の小諸であることを承知していたからである。

24 信越線の小諸駅はまだ開業していない頃で、城下町というより北国街道の宿場町

であった。後年自身の人生に大きく係わる町になるとはこの時は想像も出来なかつたはずである。

小諸の出来事は彼の脳裏に強く刻まれ、その様子は日記の欄外(10)に記されている。当着後、熊二が最初に会ったのは英語塾を開き基督教を広めていた真木重遠(11)である。真木は小諸藩牧野家の本家筋になる越後長岡藩の藩士で幕末に新潟港が開港され、宣教師のS・Rブラウが新潟やつて来た時、彼等から英語を学び基督教に接していた。この時新潟には上田藩士の稲垣信(12)もやってきてブラウンの所で真木と知り合になった。其の後稲垣がブラウンと一緒に横浜に移ったので、真木は稲垣の薦めで上田に移り、上田教会に所属しながら英語塾を開いた。

しかし上田だけでは生計が立たず、長岡藩牧野家と小諸藩牧野家との繋がりがから、小諸で英語塾を開いていた。

上田は明治十一年に、国内で七番目の教会が設立された基督教の先進地で、熊二は今回の信州での伝導の拠点を上田にすることに決めていた。上田出身の稲垣は第三回信徒大会では、横浜海岸教会牧師として参加し、旧約聖書翻訳のメンバーとして熊二とは面識があり今回の伝導活動でも、稲垣の紹介で小諸の真木の所を訪れたものと思われる。

七月十日の日記には、『吃午餐後暫時休息真木重遠来訪而招(中略)肅然妻兒有自得之色到床談論数刻五時与氏入古城址』と記し。

欄外には、『城背山後河其險可以防御敵 城旧属牧野侯荒蕪極(中略)累代之旧徳健一字而祭候其累代之異云有一碑刻中村敬宇君之文及勝海舟先生之題字薄暮帰寓真木氏之妻遇客甚親切』とある(13)。互いに初対面でも話が盛り上がったことが覗われ、真木の案内で懐古園を訪れている。

小諸城址懐古園の本丸跡には 明治七年に小諸城址を懐古園と命名した記念の碑がある。そこには「懐古園の碑」と勝海舟の書による題字が刻まれ、牧野氏の遺徳を記した碑文は昌平黌で漢文の師であった中村敬宇(正直)が撰文している。

中村正直はすでに教育者として名声を博し基督教思想の啓蒙家としても活躍、多くの著書を出版していた。後年に中村正直と熊二は、漢文の教科書を共編している。この記念碑の見学が楽しみの一つでもあったが、熊二が一番感激したのはこの夜の

出来事で『夜四少年来而訪余此四少年者已信基督之教者而常随真木氏学聖書(後略)』(14)の時の四少年のうちの一人が西島三十郎(後に政之と改名)である。

下谷の家塾にはすでに数名の信州出身の若者が学んでいたが西島は、熊二が東京戻ると手紙を出して入塾を願い出て上京、其の後熊二の書生として同居、鑑子からも信頼されていた。

この夜の彼らとの会話は伝導旅行の疲れを吹き飛ばし、心地良い眠りにつく事ができたと記している。親切な応対をしてくれた真木氏の妻は、上田の旧士族で基督教徒、世良田亮(15)の妹詩織であつた。

小諸へ上田から基督教が伝えられた様子をもろさわようこが『信濃の女たち』の中で早い時期に基督教に接した女性として、西島富寿(旧姓佐野)(16)とバイブルウーマン小島弘子について論じている。(小島弘子については近年、新たな資料が発見されている)(17)。

小諸で医師をしていた佐野義質の娘として、明治六年生れの富寿が、初め基督教を知った夏の思い出を語っている。

『私の十二歳の頃、夏になると横浜の山手女学校の校長M・ピアソンという老婦人が小諸に伝導に來られました。唐物屋(今の洋品店)の二階を借りて伝導しておられました。私と同級生でございましてその唐物屋の娘が、私の家の二階に西洋のおばあさんが来ているから覗きに來ないか、と言いましたので覗きにゆきました。二、三回行くうちにそのおばあさんが、おいでおいでをしますので部屋に入つてゆきました。すると色々話をしてくださいました。話は英語で分からなかつたのですが、側についていた若い娘さんの通訳ぶりにすっかり感心して、あのように文明開化になりたいと思つて度々聞きに行きました』

その頃小諸に基督教の講義所というのが出来まして、伝道師が來られて毎日曜日に説教がありましたので、聴きに出掛けました(中略)私は明治政府の顧問官、ドクターフルベッキから洗礼を授けて戴いたのでございす(後略)』。

佐野富寿は二四歳で九歳年上の従弟にあたる西島政之(18)と結婚している。

禁酒会と土族の教会

熊二の信州伝導の成果は西群馬ほどではないが、この地方でも成果があつたことが遺されている。

七月十一日早朝に人力車で上田に向けて出発した様子が記されている。

「本陣上田宇源次駅車己而発(略)小諸向上田梅雨新露道乾車輪軸之甚遅渚山秀雲外水

田野抑早新稲農家之多忙可知耳婦事養蚕夫挿新稲於田中小憩(後略)』(19)。
北國街道小諸宿の本陣(現存)を出発し、まだ梅雨の空けない街道筋の田畑の様子を観ると、この地方でも養蚕が行われていたことがわかる。千曲川沿いの上田・小県地域は国内でも有数に養蚕が盛んで、明治日本の主要な輸出品であつた生糸の生産により経済的にも潤っていた。

上田には明治九年に日本基督公会の教会が置かれている。国内の教会は、幕末に開港した場所が主で、全国七番目と早い時期に内陸部の上田に教会が置かれたのは、期的な出来事であつた。

上田に基督教が浸透する素地は、幕末期には形成されていたと思われ、既に藩校の明倫堂には漢訳の『旧新訳及天道遡言』という基督教の書籍が蔵書されていた。

上田藩主松平伊賀守忠優(忠固、安政6年没)は老中安藤正信の下で若年寄りを務め、藩政に於いても開明的であり、佐久間象山、赤松小三郎等を登用、輸出品としての生糸に着目、藩内の養蚕を奨励していた。最後の藩主松平忠礼(嘉永三年〜明治二八年)は、明治五年異母弟忠厚(安政二年生れ)と共に米国留学、熊二と同じラトガース大で学び、明治十二年に帰国、外務省に出仕している。弟の忠厚は帰国せず現地で結婚、建築技師として活躍明治二年にニューヨークで死去している。

この兄弟が基督教に入信していたのかは不明であるが、二人にはもう一人の弟忠孝(忠隆)がいた。彼が基督教に接した最初の上田人と云われ、忠孝は横浜の、D・タム

ソンの下で英語を学び、明治七年受洗したが翌年に死去。この後側近の鈴木親長ちかながが上田に戻り、稲垣信と共に領内に基督教を伝導したのが上田基督公会の始まりである。

上田は横浜と比べられる程に開明的で有ったと伝えられているが、宗教に関しては保守的で一般庶民には理解されず、ミッションからの支援を受けない自給自足の活動を続けていた。

上田基督公会の明治九年の入信者数は三七名、その内二三名が旧士族で別名「士族の教会」と揶揄されていた。入信者には女性も名前を連ねていた。

上田教会長老の稲垣は「禁酒会」と称して、当時の社会矯生の気運を利用して集会を開き、伝導活動を行った。その中心が小島弘子で、熊二が上田を訪れた明治十六年には小島弘子は横浜共立神学校在学中でピアソン女史の下で学んでいた。彼女が上田に戻ったのは明治二十一年である。

〈上田滞在と信州伝導の成果〉

熊二の上田滞在は五日間に及んだ、その間に熊二が鏡子宛に出した書簡が遺されている。

十一日十二字(時)当地着、海野丁(町)上村半兵衛方江旅宿を求め直ニ当所信者土屋孝吉と申人ニ接し、追々多くの信者とも懇意ニ相成、(略)
されはいつれ高崎に帰る事ハ十九日か二十日にならんと信んし申候(略)

当地の暑ハ東京と同様ニて此地ニてハ迎も消夏と申訳ニハいたりかたし八月迎もとて当地の信者ハ引留候(共この暑さニハ閉口ゆへ可成相ハ速ニ上州ニ帰り山の手ニ居住センとす 最高崎を本営と定め所々へ出張の積リニ御座候。何れ東京へ帰りハ来月中旬ならんか、(略)

当地は昨今ようようかひこを仕舞、此れより機ニかケリ候様子ニ御座候。今日一時より懇親会ニて出かけねハならず夫れゆへ一寸前件申進候、乍末皆様江も宜敷椅子もなく机もなし困却候(後略)

七月十四日 熊二

上田の投宿先、上村半兵衛(日記には上村半三良直とある)は基督教に理解のある人物と思われる。

土屋孝吉は、『上田基督教会歴史資料集』(上田市立図書館収蔵)を見ると、明治九年の受洗者名簿にその名前が見られ、初期からの信徒で明治十四年から執事を務めている。熊二と星野の上田、長野での活動で、この土屋孝吉に負うところが大きかった。

滞在中熊二は市中にも出かけ鏡子への土産として上田袖を買い求め、七月十二日の日記には『屋買上田袖与土屋諸士訪薬商日ノ屋談宗教ノ事主人能弁』とあり、上田の人々から基督教は関心を持たれていた。

書簡に記されている十四日の懇親会について日記に「常入村製造所開宴、共義教会の事」とある。〈21〉

製造所とは小島家(鍋大・鋳物製造所)のことで、常入村にあった教会堂は翌年、現在の場所に移転新築し献堂式が行われている。この時小島弘子は上田を留守にしていた為熊二とは面会していない。

熊二が上田を訪れたことを聞きつけ「余与田中ノ逢氏ハ元仙石播磨守之侍臣也共談出石之事」と日記にあることから、わざわざ訪れて来た人物もいた。

長野市へは七月十六日の早朝に出発。二日間滞在した到着後の様子が「城山小島君之委宅小島氏不在」と記されこの小島君とは、小島弘子の甥で上田教会の信徒で執事、長老を務めた小島友太郎である。長野市にはまだ正規の講義所がなかった為、土屋孝吉が熊二と星野を、長野裁判所に勤めていた小島の自宅へ案内したものである。

手紙に書いてあるように、十九日に再び碓氷峠を越えて高崎へ帰還。東京へは八月三日に戻っている。

長野市と熊二の縁は小諸義塾閉鎖後の六二歳の明治三九年から市内旭町に家族と共に移住、日本基督教会長野講義所の牧師として大正五年七二歳まで籍を置くことになる。

帰京後、熊二は伝導機構ミッションに対して「地方伝導振興策」と題した報告書を提出し、当時の信州の様子を語っている。

「信州という国は有名な善光寺はありますが、実際に人民は宗教に無頓着の様に思われます。或時説教会を開こうと思いましたが、公衆を集める適当な場所がありませんので、懇意な方丈(住職)に余儀なく本堂の使用を申し込みました。すると方丈は容易に承諾し、「君なればよし、しかし己が本尊を罵倒してはいかん、釈迦に耶蘇の説法でもないから幕を張っておこう」と言われた」《22》此れは信州に限らず当時の日本各地の状況でもあった。

明治新政府の宗教政策は迷走を繰り返し、廃仏毀釈という混乱が全国各地に引き起こされていた。人々の宗教への関心は薄れ、困った時の神頼みであり、葬儀の為の仏様、という心情であった。それ故に人々の新しい宗教、基督教への期待も大きかったと思われる。明治になり、封建的社会から抜出した教育を受けた世代が成人し、新たな思想を求めると時代を迎え

【注】

1 資料③P-365

2 資料⑦P-44

3 植村正久(うゑむらまさひさ)安政五年(1858)〜大正十四年 旗本 日本基督教会牧師 S・M ブラウン、J・バラに師事十六歳で受洗 明治七年ブラウン塾で学ぶ、明治十一年下谷教会設立明治二十年、一番町教会設立後欧米視察 伝道局長として各地で指導 プロテスタント 教皇と飛ばれる

4 巖元善治(いわもととしはる)文久三年(1863)〜昭和十七年

但馬出石藩福本藩家老家の養子 明治九年中村正直の同人社で学ぶ、十三年津田仙の農学社へ進む十六年下谷教会で木村熊二から受洗 『基督教新聞』から『女学雑誌』の主筆 明治二十年から熊二の跡を継ぎ明治女学校校長となり明治女流文学界の中心的指導者
バイオリン奏者巖本真理は孫にあたる。

5 奥野昌綱(おくのまさつな) 文政六年〜明治四三年 幕臣 輪王寺宮小姓納戸役 明治五年(ポン)に日本語を教える、文語約聖書、賛美歌の翻訳に協力、明治十年麹町教会設立6海老名弾正(えびなだんじょう)安政三年〜昭和十二年、柳川藩士 牧師熊本バンド、熊本洋学校から同志社神学校で新島襄に師事、安中教会牧師、前橋教会・本郷教会設立、熊本女学校創立、同志社大学総長を務める

27 7 資料⑥所収

8 資料⑦P-51

9 資料⑤P-183

10 資料⑦P-51

11 真木重遠(まきしげと) 弘化四年〜昭和六年 越後長岡藩士 北越戦争従軍、明治二年新潟でS・ブラウンから英語を学ぶ、明治六年横浜に移り、日本基督公会横浜海岸教会で受洗、明治九年、稲垣信と上田に移る、十一年世良田詩織と結婚、十六年まで小諸、佐久で伝導活動、明治十九年から麹町教会牧師、大阪女学院校長、明治四四年から東京在住

12 稲垣信(いながきあきら)嘉永元年(1808)〜大正十五年

江戸藩邸の生れ、松平忠礼の側近、長崎留学後明治五年D・タムソンと慶応義塾で学ぶ、同八年横浜海岸教会で、J・バラから受洗、明治九年真木重遠と上田で禁酒会組織、日本基督教会上田教会設立、其の後横浜海岸教会牧師、明治二十一年まで新約聖書翻訳に尽力、以後各地で伝導活動、

13 資料⑦P-52

14 同 P-

15 世良田亮(せらたたく)安政三年〜明治三三年上田藩弓術指南山本家の出身、

明治九年上田教会創立時の信徒、植村正久から受洗、米国海軍兵学校(アナポリス)留学、清国公使館駐在武官、日清戦争時は「天竜」艦長、海軍少将

16 佐野富寿(さのとみじ) 明治六年〜昭和四一年 小諸藩医佐野義質の次女

長野師範学校女子部から東京女子高等師範学校へ推薦入学 明治二十七年長野師範学校助教 教授兼舎、三十年従弟西島政之と結婚、上京後東京女子高等師範学校(現・お茶の水女子大)教授、大正九年新渡戸稲造に乞われ、東京女子大学教授、昭和二年退職、基督教徒ではあるが特別な教派には属せず、学生時代小島弘子の薫陶を受け熊二と交流、戦時中は小諸に疎開していた。

*佐野義質(さのよしかた)小諸藩中小姓三人扶持典医

小諸医師会長を務める幕末から明治中期まで小諸藩内の種痘に尽力、真木重遠から基督教へ導かれる。二六年熊二が小諸へ居を構える頃自宅を仮設の小諸講義所としていた。

17 小島弘子(こじまひろ)天保八年〜明治三七年 埴科郡坂城杵掛久蔵の五女

十七歳で上田藩物師小島大治郎弘遠(鍋大)に嫁ぐ、明治八年夫の死後、家族と共に J・バラから受洗明治十五年四五歳から共立神学校でマ・ピアソン女史のもとで学び各地で伝導活動バイブルブルーマンと呼ばれる。次女さだ、は牧師岡部太郎と結婚、長男大治郎

弘察の妻(後妻)包子はじめ一族が上田教会の信徒。その後、基督教信濃婦人会設立に尽る。

*小島友太郎(こじまともたろう)安政 ∞ 年)?) 小島家の分家

母は沓掛みや子(弘子の双子の姉、弘子の長女さだと結婚、判事、弁護士として各地に居住、横浜教会牧師ミロルから上田で受洗、上田教会の執事、書記を務めていた

18. 西島政之(にしじまさゆき)元治元年~昭和九年 小諸藩士族の子弟

真木重遠の英語塾で熊二と出会い明治十六年十月上京、熊二の書生から明治女学校校務主任

田口卯吉の「経済雑誌」編集記者となり、明治三十年佐野富寿と結婚

19.資料⑦P152

20.資料⑥P1354

21.資料⑦P52~559

22.資料⑤所収